

自主防災組織づくりとその活動

自主防災組織指導者用教本

平成17年2月

総務省消防庁消防大学校

白 紙

はじめに

平成16年10月に発生した新潟県中越地震は、内陸型の地震であり、家屋の倒壊、土砂崩れなどの被害を引き起こし、貴い人命が失われました。日本国内には、確認されているだけで3,000もの活断層があるとされており、このような地震がいつどこで発生してもおかしくない状況にあります。

また、近い将来発生するとされる海溝型の宮城県沖地震や東海、東南海地震では、大きな被害が出るのが予想されています。

このような大規模地震において被害をできるだけ小さくするためには、地域の防災力を高めておくことが重要です。

防災力向上の要となるのが住民の自発的な防災組織である、自主防災組織です。

本書では、地震に焦点をあてながら、自主防災組織のリーダーとなった皆さんが、自主防災活動の重要性について理解し、住民にこれを伝えていただき、共に活動を進めていくための考え方やヒントとなる事例や手法を掲載しています。

事例や手法の中には、準備に時間を要するようなものも含まれていますが、このような活動全てを行うことが目的ではありません。地域によって取り組まなければならない課題も、緊急性も異なるはずです。

ですから、「自主防災組織を育てる」の部分を参考に、地域で求められる活動のうち優先度の高いものは何か考えてみることから始めていただきたいと思います。

例えば、震災時に活動拠点となる場所を決めることが必要であれば、本書のコラムを参考にスタッフの皆さんと話し合っ場所を決め、住民に知らせることも大切です。

また、地域の子供たちに焦点をあて、資料編で紹介している「安全・かんたん手作りランプ」を作るイベントを催してみましよう。子供たちに保護者と一緒に参加してもらうことで、住民どうしのコミュニケーションを促し、自主防災活動を継続していくきっかけとすることができるでしょう。

本書を参考にしながら、何かできることから取り組み、そして、その活動を継続するよう心がけることが大切です。その結果、地域の防災力が高められ、安全で安心して暮らせるまちづくりができると思います。

さあ、肩の力を抜いて、住民の皆さんと考えるためのきっかけづくりから始めてみましょう。

自主防災組織教育指導者に対する
教育のあり方に関する調査研究委員会

白 紙

目 次

□ 自主防災組織を育てる	1
◇ 自主防災組織の位置付け	2
◇ 自主防災組織の目的、役割	2
◇ PDCA 活動による継続的活動	3
◇ 自主防災組織の PDCA 活動例	4
◇ 自主防災組織の機能及び体制	10
◇ 自主防災組織の活動	11
☆ 地域の皆さんと一緒に考えてみましょう	15
☆ 地域のイベントに防災を盛り込んだ楽しい活動もあります	16
□ リーダーシップを発揮する	27
◇ リーダーの役割	28
◇ リーダーを務めるにあたって	29
◇ 教育技法の基礎知識	30
◇ 説得技法	33
□ 地域の防災力を高める	35
◇ 地震に対する地域の防災力	35
◇ DIG の意義	37
☆ DIG(ディグ)を行い、私たちのまちの防災力を確認しましょう	38
◇ DIG をきっかけとした「気づき」の例	42
◇ まちなか防災訓練の意義	43
☆ まちなか防災訓練を行い、私たちのまちの防災力を確認しましょう	44
◇ まちなか防災訓練をきっかけとした「気づき」の例	47
□ 資料編	48
◇ 住民の興味を引き付ける手法について	48
☆ 身近な道具を使ったサバイバル技術例	49
☆ 安全・かんたん手作りランプ	49
☆ サ・ア・テふしぎな卓上コンロ	51
☆ 災害・緊急時・キャンプ等で困らない 簡単料理 あらかると	53
◇ 地域住民が習得しておくことが望ましい知識・技術	56
☆ 「防災・危機管理 e-カレッジ」「救命講習」「防災館」で 災害に対応するための知識や技術を学びましょう！	57
◇ 自主防災組織の活動支援等	60
◇ 各都道府県の自主防災組織の状況	63
◇ 日本の主な断層帯および周辺海域の地震長期評価	64

☆：住民用教本にも掲載

白 紙

自主防災組織を育てる

阪神・淡路大震災のような大規模災害時には、建物の倒壊や火災、道路・橋梁等の損壊が同時多発的に発生する他、電話の不通や電気・ガス・水道等の使用不能等も発生し、消防機関等の活動が著しく制限されたり、対応の遅れの出る可能性があります。

そのような中では、発災後、一定の間は、地域住民の一人ひとりが“自分たちの地域と自らの命は、自分たちで守る”ことが必要で、そのためには出火の防止、初期消火、災害情報の収集伝達、避難誘導、被災者の救出救護、

応急手当、給食給水の実施等、地域単位の自主的防災活動が求められます。とりわけ、地域に住む高齢者等の要援護者への時宜を得た現場でのきめの細かい支援活動が、災害被害軽減のために重要であることが多くの災害経験の中で分かってきました。

これらの役割を担う組織を“自主防災組織”と呼びます。ここでは、地域防災力向上の鍵となるこのような組織について、その位置付け、目的・役割、活動形態等について見てみましょう。



<コラム> 山古志村、たった1日で全員避難の素晴らしさ

平成16年10月の新潟県中越地震では、各地で尊い命が失われましたが、その中で山古志村全員避難の見事さは、特筆に値するでしょう。

勿論、各防災機関の協力による救助、救出も素晴らしかったのですが、それ以上に素晴らしかったのは、村長さんの「2,168名の村民の内、5名が避難の説得に応ぜず残留する。その他には、行方不明者はいません！」との言葉でした。あの様な非常事態下で極めて正確に状況を掌握できていたのです。

その秘密は、各集落で行政のお手伝いをしてもらっている区長さんでした。普段から、住民の動向を完全に把握し、その情報が間違いなく村長さんの下に集まってくる！という仕組み、伝統が正に村を救ったのです。

これこそ、生きたコミュニケーション、そして、全員避難成功は地域コミュニケーションの勝利だったのではないのでしょうか。

都会では無理だよ。いえいえ、懐かしき故郷ほど親密なコミュニケーションは、一朝一夕には得られないでしょうが、日々の挨拶が街を救うかもしれませんよ。さあ、今がスタートの時です。

自主防災組織の位置付け

大規模災害において被害を最小化するためには、消防機関等の公共機関の活動のみに頼ってはいは、達成できないことを私たちは、数多くの災害の経験を通して学んできました。

つまり災害の被害を軽減させる（このことを減災と呼びます）には、公共機関による救助・支援などの“公助”に加えて、地域住民相互による援助である“共助”、そして自らが自らを守るという意味での“自助”のそれぞれが必要であるということです。

自主防災組織は、この内、“共助”の

ための中核の組織となるもので、かつ“自助”を行う住民個人を直接・間接に支える地域における基盤組織となるものです。地域には寝たきりの高齢者、身体機能障害者等、災害に際して介助の必要な人々も住んでいます。災害のように緊急性を有する事態では、公共機関による支援、救出救護等が災害発生直後には期待できない事も多くあります。自主防災組織の共助の活動は、このような人々の被害を軽減させるのに極めて重要なものです。

自主防災組織の目的・役割

巨大な災害時に減災を効果的に速やかに実施するためには、初期消火、被災者の救出・救護、避難等の防災活動を行うことが不可欠です。

しかしながら、このような活動は、住民各自がばらばらに行動していても効果は少なく、場合によっては混乱をもたらす事さえあります。地域としての防災力を最大限発揮するためには、何らかの形で組織だった活動が必要となります。

したがって、地域住民による防災活動を組織的かつ実効性のあるものとするために造られるのが自主防災組織と言えます。

自主防災組織は、①平常時の役割と②災害時の役割の二つを通常持ちます。平常時には、仮に災害が起こったとしても、その予想される被害を出来るだけ軽減させるような活動、つまり予防的活動を行うことが求められます。

また同時に、災害が発生したときに備え、地域防災力が最大限発揮できるような体制・状態を準備・用意するための活動を行います。一方、災害時にはその時々状況に応じて、地域の減災のために初期消火、救出・救護、避難誘導などを行い、また、予め用意した様々な対策を機動的に行うことが役割となります。

<コラム> 孤立した保育園に対する近隣の協力事例

過去には、地震により噴出した大量の地下水が保育園に流れこんだ事例があります。水かさが急激に増え一面が泥海になる中、泣き叫ぶ園児を抱きかかえ保母たちは立ちすくみ途方にくれていました。そこへ近隣の住民や事業所の人たちがかけつけ、園児の救出や所在確認などに協力した結果、事なきを得たのです。

この例は、災害時要援護者を抱える施設と近隣との協力関係の重要性を教えるものですが、地域における自主防災組織の活動のあり方を考える上で示唆に富んだものといえるでしょう。

PDCA 活動による継続的活動

防災力向上は一朝一夕には出来ません。まずは、地域に被害を及ぼす恐れのある災害とは何かなどを知ることから始め、さらに、それらの災害に対する弱さを認識し、その上で、いざ災害が起きても致命的な被害に至らないように準備をしておく必要があります。しかし、人手やお金の掛かることでもあり、必要と考えられること全てを一度にやることは出来ません。

実現可能な防災目標を掲げて、今年より来年、来年より再来年と地域防災力向上を目指して着実な活動が求められます。

このような一連の活動は、PDCA サイクルと呼ばれ、具体的には次のように行われます。

(P : 計画)

地域の防災力向上に資する方策に関し、優先順位の高いものから実施のための計画を作っていきます。その際、何故、そのようなことを行うことが重要なのか、あるいは他の対策に対して優先順位が高いのかなどを地域の人々全員が納得することが重要です。また、計画には、誰が、どのように、いつまでに対策を行うかを明らかにしておく必要があります。これらによって、必要な対策が、真に実行可能なものなのかが分かるからです。

(D : 実行)

次に、計画された対策を、確実に実施していかねばなりません。防災は、多くの場合、地域全ての資源の活用・動員を必要とします。したがって、対策実施には、地域で共に生き、生活する他の団体、例えば企業、消防・警察などの防災機関、行政などとの緊密

な関係に基づいた連携の下、その協力を得ていくことが重要となります。

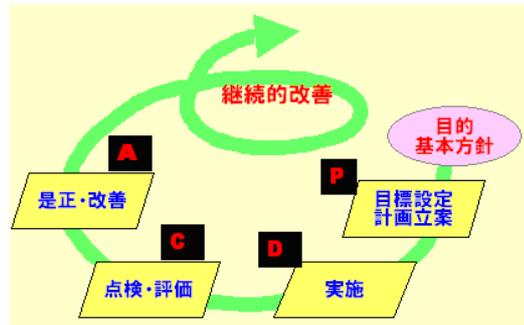
(C : 点検・評価)

実施した対策が有効であるかどうかを常に点検・評価しなければなりません。しかしながら、懸念する災害は、いつでも起こるものではありません。したがって、有効性の検証は、実際の災害の起きるまで待つのではなく、災害発生を仮定した日常訓練の中で行うことなどが重要です。このような、あらゆる機会を利用して現状の防災対策を点検・評価しながらより効果的な減災に向けた改善を図っていくことが大切です。

(A : 改善)

減災に向けた対策に関し、その有効性に懸念が生じたときには速やかに改善を行う必要があります。改善を着実に行っていける仕組みも一方で考えておかなければなりません。

以上のような一連の活動 PDCA は、繰り返し繰り返しサイクルとして行われることとなります。このことは、自主防災組織の活動が、一過性のもので無く、息の長い地域に根付いたものにしなければならぬことを示しています。



自主防災組織のPDCA 活動例

それでは、自主防災組織の活動事例を具体的に見ていきましょう。

次の表は、ある自主防災組織の年間計画です。年度初めに計画を策定(P)、そして、講習会や訓練を計画に基づき

実施します(D)。

年度末になると、その年の活動結果を整理し、問題点を抽出(C)して、その問題点の解決策を検討し改善する(A)の流れとなります。

ある自主防災組織の1年間の取り組み(年間計画例)

日時	内容
4月1日	年間計画の決定(昨年度を検証して) P
5月1日	救急講習実施 D
9月1日	防災総合訓練 D
11月9日	高齢者宅訪問 D
12月	年末警戒 D
2月	1年間の検証 C
3月	検証の結果対策を改善 A
	新年度計画案作成 P

計画
実施
点検評価
改善

PDCA

しかし、その年間のサイクルの中にも小さなPDCAがあります。

総合防災訓練で見えていきますと、訓練実施の計画(P)そして実施(D)訓練結果の評価(C)そして改善の実施(A)となります。

ここで大切なことは、訓練をすることは、消火や救急の知識技術を身につけることに大きな意義がありますが、そこからさらに発展して、訓練の結果自分たちの町は、安全か、防災資器材が足りるかなど、考えたり気づいたりしたことを改善することです。

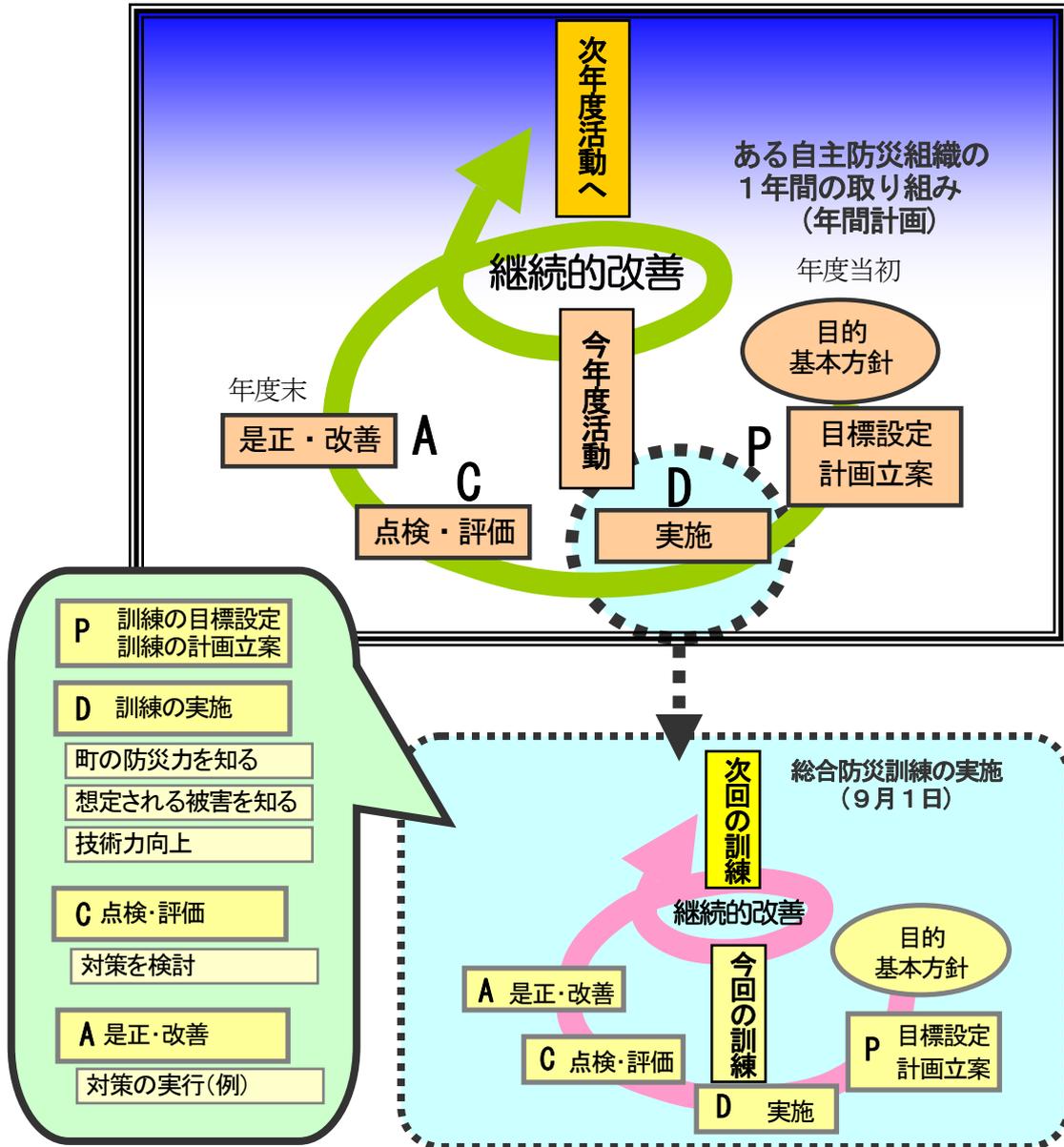
例えば、まちなか防災訓練を実施したとき、消火器が思うように集まらな

い→消火活動が遅れる→消火器を増設したらいい→消火器を設置しよう、といった気づきから、改善策を実施するなどです。

また、PDCAサイクルは、継続することが大切ですので、防災訓練や講習会などばかりではなく、組織を活性化するために、組織を構成する方が集まりイベントを開催し、コミュニケーションを図ることも方策です。

リーダーとして大切なことは、肩肘を張らずに、楽しく、長いスパンで防災力を向上しようという考え方で進めることです。

1年間のPDCAと個別行事のPDCA



<コラム> 訓練に多く参加して頂くために

ある町会主体の自主防災組織で、訓練を計画し参加を求めましたが、人がほとんど集まらず、訓練自体も盛り上がり欠け、役員一同意気消沈。

そこでリーダーは、どうすべきか思案したところ、強力なつながりのある小学校とそのPTAに話を持ちかけました。

校長先生、PTAの会長が熱心であったことも大きなポイントでしたが、PTA会長が呼びかけをしたところ、「お宅は訓練に出るの?」と言ったコミュニケーションが広がりました。

「それではうちも」ということで、家族全員参加する方もおられ訓練参加者が増えたそうです。訓練は朝9時ぐらい開始が普通ですが、前述にあるように、働いている方などたまの休みと言うことでなかなか参加して頂けないようです。

PTAといった教育を通じた強いつながりのある組織に働きかけることにより、訓練はもとより地域に密着した活動ができた事例です。

PDCAの実践例（気付きから実行へ）

ここでは、京都大学防災研究所研究員 田村圭子氏が、ある都市の防災計画策定指導にあたられ、計画の策定のみならず地域防災の実行まで進められた題材を基に、地域の防災力向上の進め方を整理頂いたもの（抄）を掲載します。

地域の防災力を向上させるためには、1) リスクを確認評価する、2) 防災計画をつくる、3) 災害対応体制を立ち上げる、4) 訓練や準備を行う、5) 活動を評価し、必要に応じ改善する PDCA サイクルに則った活動を進めることが効果的です。

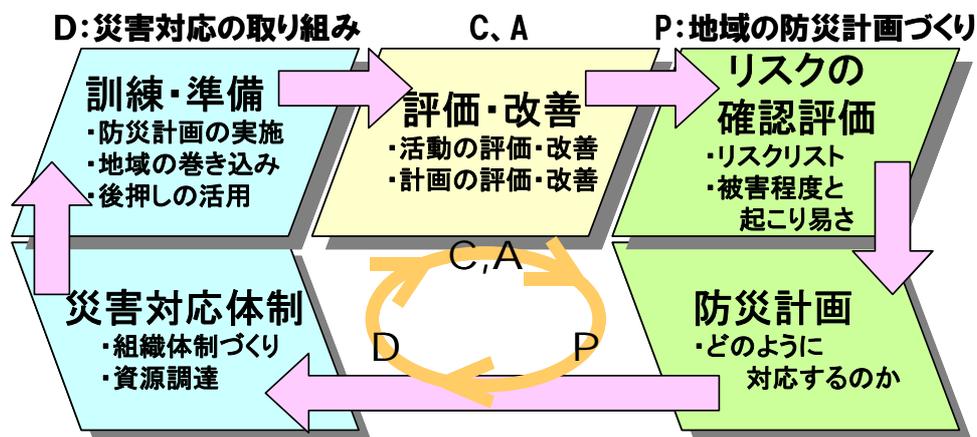
最初の「リスクを確認評価する」では、地域に存在するリスクを洗い出すとともに、地域の現状を踏まえた上でそのリスクがどのような影響を及ぼすのか、どの程度の起こり易さなのかを理解することが重要です。リスクをリストに整理し、それぞれの「影響（被害程度）」と「起こり易さ（可能性）」を確認・評価することが、地域の防災力向上の第一歩です。

次に、リスク評価に基づいて、地域の防災計画をつくります。防災計画とは、地域でどのようにリスクに対応するかを計画の形でまとめたものです。以上の「リスクを評価する」、「防災計画をつくる」のステップは、「地域の防災計画づくり」として、PDCA サイクルの P:計画に位置付けられます。

地域における防災計画を策定すること

ができれば、それに基づいて地域の災害対応のための体制を構築し、実際に防災計画に則った訓練や予防対策、被害軽減策を実施します。これらの活動は、PDCA サイクルの D:実施に位置付けられます。ここでのポイントは、自主防災組織を中心に地域を巻き込んだ組織の構築や活動としていくことです。そのためには防災組織による訓練を地域のイベントとして仕掛けるのも有効な方法です。

訓練や様々な準備などを行った後には、それらの活動を振り返って点検・評価し、改善すべき点があればそれを明らかにし次の活動に反映していく必要があります。また、年度の最後には一年間の活動全体を振り返って点検・評価し改善点を明らかにしていく必要があります。これが、PDCA サイクルの C:点検・評価および A:改善です。ここでのポイントは、どういったかたちであれ活動を振り返ってみるということです。振り返ってみて感じたことが次の活動をより望ましいものとする原動力になり、ひいては地域の防災力向上につながっていきます。



防災計画の策定を軸にした自主防災組織の活動内容例（その1）

チェック	作業項目	備考
1. 活動準備段階		
①活動を定義しよう		
<input type="checkbox"/>	対象地域を明らかにしよう	
<input type="checkbox"/>	ステーク・ホルダー（地域の防災に関係する組織や住民）を明らかにしよう	
<input type="checkbox"/>	活動の目的を決めよう	
<input type="checkbox"/>	最終成果物を決めよう	
<input type="checkbox"/>	予算を決めよう	
<input type="checkbox"/>	期間を決めよう	
<input type="checkbox"/>	終了条件を決めよう	
<input type="checkbox"/>	活動推進に求められる役割構成を決めよう	
②活動を立ち上げよう		
<input type="checkbox"/>	コミュニティのキーパーソンに協力要請しよう	
2. リスク分析段階		
①コミュニティの計画策定チームを作ろう		
<input type="checkbox"/>	防災計画策定メンバーを集めよう	
②コミュニティの現状を分析しよう		
<input type="checkbox"/>	コミュニティの既存の防災への取り組みを列挙しよう	例えば、夜回り、消防団の活動、防災訓練、避難訓練、ハザードマップ作りなどの活動です。列挙することによりコミュニティとしての活動の程度（現実的な実行可能性や限界等）を把握します。
<input type="checkbox"/>	外部の団体から学ぼう	消防、警察、役所、病院、ライフライン関連企業などから、地域での防災への取り組みについて話を聞いてみましょう。
<input type="checkbox"/>	条例と規則について確認しよう	地域の防災に関してどのような決まりごとがあるのか行政担当者に確認してみましょう。
<input type="checkbox"/>	人的資源について確認しよう	コミュニティには、どのような人がどのような時間帯に存在し、実際にどの程度の活動が可能かを調べてみましょう。
<input type="checkbox"/>	コミュニティの物的資源について確認しよう	災害時に使用可能な機材（防火・消防機材、通信機材、応急手当用品、緊急事態用補給物資、警報システム）や利用可能な施設があるか確認してみましょう。
<input type="checkbox"/>	外部の資源について確認しよう	国や県、消防・警察、地域に関連する大企業、ボランティア団体等からどのような支援が得られるか確認してみましょう。
<input type="checkbox"/>	保険について確認しよう	コミュニティにとって重要な施設については、火災保険・地震保険への加入も検討してみましょう。
③コミュニティの脆弱性を分析しよう		
<input type="checkbox"/>	潜在的な危機を書き出そう	地域に存在すると思われる「危機」を列挙してみましょう。 歴史的要因：過去に地域で発生した危機や災害 地理的要因：例えば、「川のそば」「道幅がせまい」「急な坂道がある」「がけがある」「断層の近傍に位置する」等 物理的要因：例えば、「木造2階建てが多い」「間口が狭く避難し難い建物が多い」「旧建築基準による建物が多い」等
<input type="checkbox"/>	潜在的な人的被害を考えよう	それぞれの危機での死者や負傷者が発生する状況やその可能性を想定してみましょう。
<input type="checkbox"/>	潜在的な物的被害を考えよう	それぞれの危機での、施設や財産に対する被害の状況やその可能性を想定してみましょう。

防災計画の策定を軸にした自主防災組織の活動内容例（その2）

チェック	作業項目	備考
3. 計画策定段階		
①対策を抽出しよう		
□	対策を列挙しよう	<p>コミュニティにとっての「危機」に対して、以下の4時点における対策は何かを考えてみましょう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 被害が出ないように危機発生前からできること 2) 被害が出てしまったあとその被害が大きくならないように、危機発生前からできること 3) 危機発生直後、コミュニティがすべきこと 4) 危機発生後約2週間、状況がある程度落ち着いた後、コミュニティの復旧のためにすべきこと <p>ここでのポイントは、実現可能性に重点をおくのではなく、「危機」に対して必要な対策は何かを考えて、思いつくものを列挙していくことです。</p>
□	列挙された対策を整理しよう	<p>列挙された対策を吟味し、整理しましょう。整理の方法としては、次のような視点が考えられます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 土地利用計画 2) 重要施設の配置 3) 店舗・個人住宅における対策 4) 広報活動 5) 防災教育 6) ビジネスの再建のための対策 7) 防災対策のための財源 8) コミュニティの防災対策能力の向上 9) 防災に関する研究成果や技術の吸収
②防災計画を策定しよう		
□	対策を実現可能にするための「行動目標」と「具体的な実践計画」を明確にしよう	<p>「各々の対策を実現するために、コミュニティは具体的にどのような行動をとっていくべきか」を話しあいリストにしてみました。</p> <p>例えば、行動目標としては「消火器を配置する」、実践計画としては「何月何日に何個の消火器を購入して段階的にどこに配置する」というものです。</p>
□	行動目標の優先順位を明確にしよう	<p>それぞれの行動目標が、以下のどれに該当するかを考えながら優先順位を決定してみましょう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) ここ1年の間に実現可能 2) 2～3年の間には実現したい 3) 長期的に実現を目指す
□	計画を記述しよう	<p>以上の作業の内容を反映させながら防災計画を記述してみましょう。具体的には、以下の6つを内容として計画を記述します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 防災計画の目的 2) 計画が対象とする事態（「危機」の想定結果） 3) 対策体系（対策のフィールド毎の整理結果） 4) 対策を実現可能にするプログラム （行動目標と具体的な実践計画） 5) それぞれのプログラムのスケジュール 6) それぞれのプログラムの実施責任者、体制

防災計画の策定を軸にした自主防災組織の活動内容例（その3）

チェック	作業項目	備考
4. 計画実施段階：防災計画を実行しよう		
<input type="checkbox"/>	行動目標実現のための資源を調達しよう	各々の行動目標実現のために必要な、人的資源、物的資源、資金の調達方法について話し合ってみましょう。 コミュニティ内でまかなえない資源であれば、外部の資源に頼ることになります。行政などへ働きかけるように、コミュニティを導いていくことも大切です。
<input type="checkbox"/>	防災計画を実行しよう	確保した資源を用い、防災計画を実行してみよう。 実行に際しては、その内容を記録しておくことが重要です。活動の記録は、次年度の活動をより充実したものとしていくことにつながります。
<input type="checkbox"/>	コミュニティをとりまく環境に、行動目標を後押しする要因があるか検討しよう	「行政やNPOなどによる防災講座の開催」や「近隣企業での防災訓練」など、コミュニティの外に行動目標を後押しするチャンスがあれば、積極的に導入を検討してみましょう。 コミュニティをとりまく人々とのコミュニケーションによって、コミュニティ内の議論では出てこなかった新たな対策や行動目標・実施計画が出てきたり、防災計画策定の進度が加速したりすることもあります。
5. 評価改善段階		
<input type="checkbox"/>	活動を評価しよう	一年間の活動を振り返って見てみましょう。その際は、「1. 活動準備段階」での活動の定義を踏まえ、以下の問いに答える形で進めてみましょう。 <input type="checkbox"/> 対象地域やステーク・ホルダー（地域の防災に関係する組織や住民）の設定は妥当でしたか。 <input type="checkbox"/> スケジュールどおり活動できましたか <input type="checkbox"/> 予算どおり活動できましたか <input type="checkbox"/> 最終成果品は得られましたか <input type="checkbox"/> 活動の目的は達成されましたか もし必要があれば、次年度の活動においてはその定義を改善してみましょう。
<input type="checkbox"/>	防災計画を評価・改善しよう	防災計画全体の評価を1年に1度行ってみましょう。その際は、以下の問いに答える形で進めてみましょう。 <input type="checkbox"/> 活動を進める中で計画を改善する必要性が出てきましたか。 <input type="checkbox"/> 活動の中で新たに得た教訓によって計画を改善する必要性が出てきましたか。 <input type="checkbox"/> コミュニティ内の変化、特に地理的条件や物理的条件の変化によって計画を改善する必要性が出てきましたか。 <input type="checkbox"/> コミュニティをとりまく環境の変化によって、計画を改善する必要性が出てきましたか。 もし必要があれば計画を改善してみましょう。

自主防災組織の機能及び体制

自主防災組織は、消防などの公共防災機関では把握し切れない地域の特性などを考慮した、きめ細かい防災活動を目指して作られます。

その基本は、自らの住む地域の災害に係る様々な情報を持つ事です。

例えば、災害に弱い箇所を知っていること、お年寄りなどのいわゆる要援護者がどこに住んでおられるか、またそれらの方々をいざとなった時に、どのように安全な場所に移動させることができるのかなどの具体的な情報を知ることが大切です。

このようなことを勘案すると、地域に在って災害に立ち向かい、その被害を最小限に食い止めるために活動することを求められ、上のような特性を持つ自主防災組織は、日常の場で接し、交流している人々によって構成されることが望ましいということになります。

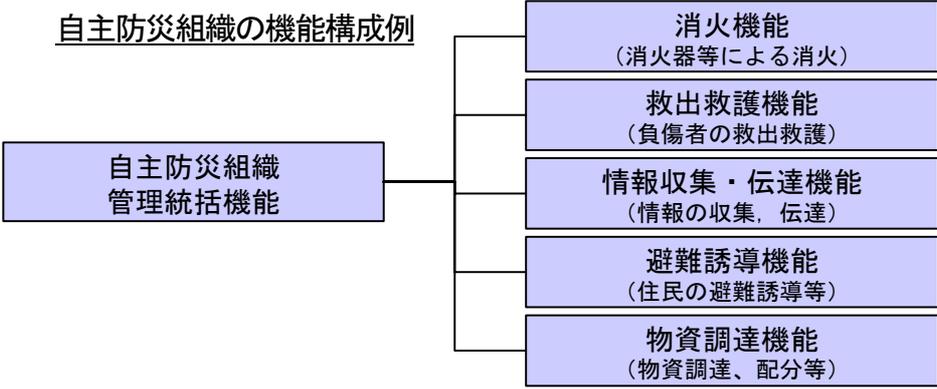
したがって、最も典型的な自主防災組織は、普段から生活の場、地域レクリエーション、会合などで顔を合わせることが多く、かつ地域コミュニティ活動、住民自治活動を共通とする町内会・自治会などを単位として作られることが考えられます。

体制としては、これら既存組織の中に新たに防災を担う組織として自主防災組織を配置したり、既存組織の新た

な機能として位置付けたり、また、地域の実情を考慮して例えば街区、小学校校区などを単位とすることも考えられます。いずれにしても住民の日常生活の基盤となっている「地域」と一体とすることが大切です。

自主防災組織は、その形態がどうであれ、その地域に実際に住んでいたり働いていたりする全ての人々の参加が基本となります。これは、地域における防災が、隣り近所の助け合いによる被害拡大防止を基本としているものの、それにも増して、個々の世帯や職場がまずは自らが被害を出さない、ということが大切だからです。

自主防災組織の機能は、下記の自主防災組織の機能構成例に示されるようなものですが、その実行にあたっては、固定的な組織形態に拘ることなく、その規模、組織誕生の経緯、地域特性に応じて、一番望ましい形で編成することが大切です。また、場合によっては、班などという組織の形をとらない活動になる事もあります。これは、災害が発生した場合、集まった人だけで直ちに必要な活動（例えば消火機能等）を行い、さらに時と共に果たすべき機能も変化していく、といった場面も考えられるためです。



自主防災組織の活動

自主防災組織の活動は、大きく①平常時の活動と②災害時の活動の二つに分けられます。

①平常時の活動は、さらに二つに分けられます。

まず、i) それぞれの家庭において災害の備えをすることです。

これは各家庭で取り組むものですが、自主防災組織として、その対策の指導や実施のお手伝いをするのも重要な役割でしょう。これらについては総務省消防庁の「防災・危機管理e-カレッジ」で詳しく紹介しておりますので、ご覧ください。

そして次にii) いざという時に、速やかに効果的な減災活動を行うための準備・訓練です。

また、②災害時の活動は、災害現場における減災活動の実施です。

これらの活動の内容を災害発生時の時間経過に沿って例示すると次ページ以降の図の様になります。

自主防災組織への参加者は、災害時に速やかに効果的に減災活動を行うためには、準備や訓練を通じて自らの役割を知り、様々な知識や技術を身に付けることが望まれます。

従って、自主防災組織の活動は、結果的に平常時の訓練に重点を置き、その活動を通して地域を知り、減災のための知識・技能を身に付けることが大切となります。

そして、発災後、復旧復興に向けての活動があります。これらは、地域をあげての活動になり、長期的な取り組みが必要とされます。

これにどのように関わるかは、その地域における自主防災組織の形態や役割により異なりますが、場合により自主防災組織という枠組みにこだわることなく、地域としての活動に参画することを考えておくことも大切です。

<コラム> 自主防災組織の活動拠点

自主防災組織活動においては、人や情報を集め効果的な活動を進めるための活動拠点が必要です。活動拠点としては次のような場所が望ましいといえます。

「地域の住民が普段から使いなれている公民館などで、人の集まることのできるスペースのある場所」

「電気、ガス、水道などのインフラ設備が備わっている場所」

「個人の住宅でない場所」

なお、災害種別が異なると、被害の内容や被害を受けやすい場所が異なりますので、災害ごとに適切な活動拠点を選定することが必要です。

自主防災組織の活動例（その1）

時期	災害時の活動	災害時に備えた平常時の活動
災害発生直後 消火 出火防止 段階 ・ 救出救護 段階	<div style="border: 2px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-bottom: 20px;"> <p style="text-align: center;">＜消火・出火防止活動＞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 初期消火の実施 2. 出火防止の広報 →災害時の火の元確認、電源ブレーカーの遮断等の広報 →倒壊家屋などからの出火注意の広報 </div> <div style="border: 2px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;">＜救出・救護活動＞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 救出、救護活動 →救出（在宅治療者等については医療機器や薬も忘れずに） →救出状況の確認（救出漏れの排除） →応急手当の実施 →救出結果、避難先等を市町村対策本部へ報告 </div>	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-bottom: 20px;"> <p style="text-align: center;">＜消火機能を中心とした活動＞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 出火防止の指導点検 →木造家屋や火気取り扱い施設などの確認 →住民の居住状況（昼間不在、高齢者世帯、障害者世帯など）の確認 →消火設備（消火器、消火用水、消火バケツなど）通報設備（火災報知器、身近な電話）などの設置と点検 2. 消火体制の整備、訓練実施 →消火担当（昼間、夜間）の確認 →消火訓練の実施 </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;">＜救出・救護機能を中心とした活動＞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 安全な住まい →家具の固定 →家具のない部屋での就寝など 2. 救出・救護体制の整備、訓練実施 →高齢者や要援護者の居住状況、救出時の注意事項や携行品（薬、医療機器など）の確認 →高齢者や要援護者の救出担当の確認、救出方法の検討 →救出訓練の実施（救出方法の実行可能性確認） →応急手当等の習得および訓練 </div>

＜コラム＞ 阪神・淡路大震災時の体験談（救出）

次は、近くの医院に走る。半壊した中から聞き慣れた先生の声がする。「生きている。大丈夫だ」二次災害を気遣いながら、窓から寝室へとたどり着いた。寝巻姿の先生が落下した天井と家具の隙間に小さくなって、救助を待っていた。

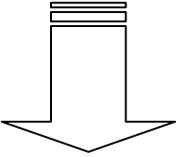
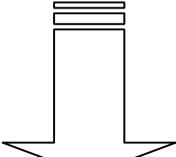
この後、近所の人や見知らぬ人たちが徐々に集まり出し、救助の輪が広がり始めた。

商店街西端のある布団店の人が生き埋めになっている、との連絡で至急現場へ向かった。どうやら、おじいさんと娘の、2人が取り残されているようだ。倒壊した2階建の家の中は、直径20センチ位の柱や梁などが入り混じり、前進できない。余震の続く中、ノコギリを使っての救出活動を展開した。作業が進みにつれて、我々もいつ生き埋めになるかもしれないという不安が頭を過る。

やっとのことで、2人に近づくことができた。こうして、たくさんの人が一丸となり、救出したのである。【消防団員】

出典：「雪（1995年4月号）」神戸市消防局広報誌『雪』編集部

自主防災組織の活動例（その2）

時期	災害時の活動	災害時に備えた平常時の活動
<p>消火・出火防止、救出救護が一段落した頃</p> <p>組織的活動の開始段階</p>	 <p><自主防災組織管理統括活動></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 救助地区本部（市町村対策本部）との連絡・調整 2. 各班統括、調整、指導 <ul style="list-style-type: none"> →各班の活動状況の把握 →応援要員等の調整 3. 住民等の救出救護状況の確認 <ul style="list-style-type: none"> →住民の安否確認 →避難状況の把握 	<p><管理統括機能を中心とした活動></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 組織の構築、統括及び渉外 2. 防災計画、災害時活動計画の策定 <ul style="list-style-type: none"> →防災計画、災害時活動計画の策定および計画に沿った活動の牽引、統括 →各班の災害時活動計画の確認 →年間活動の評価、改善点の確認 3. 組織各班の運営指導 <ul style="list-style-type: none"> →各班の活動目的の明確化 →各班の災害時活動計画の確認と調整 4. 他機関との連絡調整、支援の申し合わせ・協定の締結 <ul style="list-style-type: none"> →行政や地域の団体、地元企業などとの調整や支援協定の締結 5. 防災会議の開催 <ul style="list-style-type: none"> →住民や行政、地域の団体、企業等と地域防災活動を確認・調整 6. 訓練計画の策定、実行統括 <ul style="list-style-type: none"> →訓練計画の策定および訓練計画に沿った活動の牽引、統括 →災害補償制度など活動や訓練に関する手続き →訓練の評価、改善点の確認
<p>情報収集広報活動の開始段階</p>	<p><情報収集・広報活動></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 情報収集、伝達 <ul style="list-style-type: none"> →利用可能な情報機器、情報伝達ルートの確認、情報入手体制構築 →地域の被害情報収集 →避難勧告などの情報の収集 →地域の危険箇所の状況把握（自主防責任者への報告） →行政等からの情報の住民への伝達、自主防責任者の判断結果の住民への伝達 2. パニック防止のための広報等 <ul style="list-style-type: none"> →行動レベルでの指示、広報 →行動目的、行動目標を明確にした指示、広報 	<p><情報収集伝達機能を中心とした活動></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 防災知識の普及、意識の高揚・持続 <ul style="list-style-type: none"> →災害について考えるキッカケ作り →地震災害の特徴、災害時に起こりうる事態、注意すべき事項等の周知 2. 地域の各種情報の把握 <ul style="list-style-type: none"> →防災行政無線等による情報入手方法の確認 →災害情報の意味の確認、周知 →避難要否の判断基準等、災害情報を行動に結びつけるのに必要な事項の確認、明確化 →災害情報の共有化方法の検討、普及 →災害時広報のあり方の確認（パニック防止広報の方法など）

自主防災組織の活動例（その3）

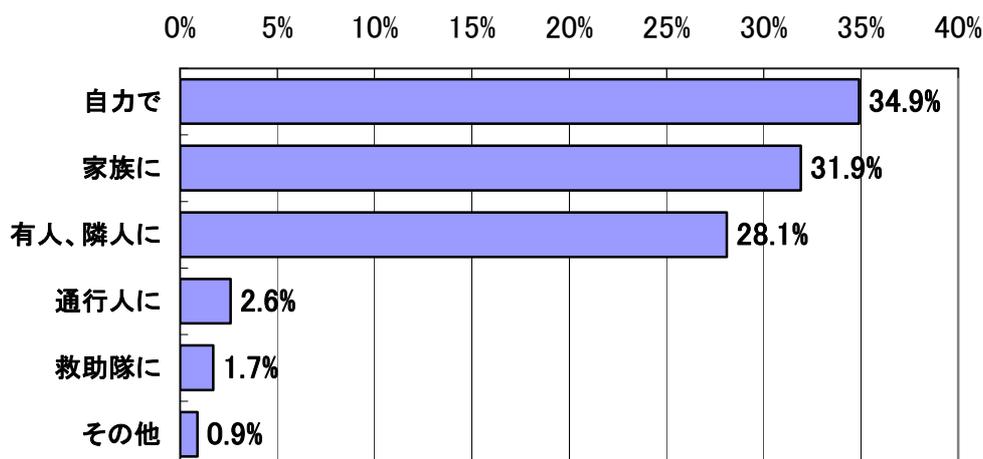
時期	災害時の活動	災害時に備えた平常時の活動
<p>周辺の状況が理解できてきた頃</p> <p>避難（避難が望ましい場合）</p>	<p style="text-align: center;">↓</p> <div style="border: 2px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px;"> <p><避難誘導></p> <p>1. 避難誘導</p> <ul style="list-style-type: none"> →不要な荷物などを持たないことの徹底 →避難先、経路の宣言 →人員確認（人数、負傷等状況確認） →避難誘導・介助 →避難先での人員確認 <p>2. 避難先での環境整備</p> <ul style="list-style-type: none"> →敷物・目隠しなどの設営 →トイレ等の設営 </div>	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px;"> <p><避難誘導機能を中心とした活動></p> <p>1. 避難計画の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> →避難先、避難経路の明確化 →避難経路上の危険箇所等の把握 →高齢者、要援護者などの避難支援方法の検討、準備 →「不要な荷物を持たない」など避難時の注意事項の明確化、住民への徹底 <p>2. 避難訓練実施、計画見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> →避難訓練の実施（避難経路、方法などの実行可能性確認） </div>
<p>とりあえずの生活環境確保段階</p>	<p style="text-align: center;">↓</p> <div style="border: 2px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px;"> <p><物資調達、配分活動></p> <p>1. 救助物資等の配分協力</p> <ul style="list-style-type: none"> →毛布など嵩張るものの受け入れ場所、配分場所の確保 →食料品・水の衛生管理、配分場所の確保 →配分方法の明確化、配分協力 <p>2. 炊き出し、給水</p> <ul style="list-style-type: none"> →炊き出し場所の確保 →炊き出し時刻などの明確化 →配分 </div>	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px;"> <p><物資調達機能を中心とした活動></p> <p>1. 救助物資等の調達・配分計画の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> →必要物資（内容、量）の想定、調達先候補の検討（行政など外部からの支援物資の受取りと自主的な入手の両方がある） →配分方法の検討 →炊き出し体制、炊き出し場所などの検討 <p>2. 地域での共同備蓄</p> <ul style="list-style-type: none"> →共同備蓄対象品目の検討、備蓄方法、体制の検討 →備蓄品の入手・管理体制の検討 →地域共同備蓄の実施 <p>3. 非常食その他の家庭備蓄等の呼びかけ、支援</p> <ul style="list-style-type: none"> →備蓄品候補、備蓄方法、入手先等の案内 </div>

地域の皆さんと一緒に考えてみましょう

1995年1月17日に発生した「阪神・淡路大震災」では、救助された人（自力で脱出を含む）の約95%は自力でまたは家族や隣人によって救助されています。

私たちの地域では、お互いに救助することができるでしょうか？また、協力して初期消火を行うことができるでしょうか？

生き埋めや閉じ込められた際の救助



出典：(社)日本火災学会「兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書」

阪神・淡路大震災時の初期消火の実例

～ある自治会長の体験談より～

3丁目でも母子が生き埋めになり、亡くなられているというのも聞いていましたので、これらの方々の遺体を灰にしてはならないと、妻と一緒に大声で「バケツリレーに協力してください」と叫び続けました。このバケツリレーは誰が始めようと言ったのかわかりませんが、誰々というでもなく始まったように記憶しています。

また、2丁目に消火栓があったのですが、水が出ないのを知っていましたし、たまたま防火貯水槽があって、中に水があったので、バケツリレーができたように思います。

最初は少人数だった、このバケツリレーも私たちの呼び掛けに応じてくださって、通行人や学生さん、中には焼け出された3丁目の方々までリレーの列に加わっていただきました。ですから、一番多いときで東西方向に50人、南北方向に50人の約100人の協力者があったと思います。

だんだん炎が迫ってきた時、母子が生き埋めになった家の南隣にある米穀倉庫の持ち主の方が「この倉庫の屋根を壊して下さってもいいですよ」と快く申し出てくださったので何人かでロープを掛けて、引きずり落としました。

この時ほど人の情けというものを感じたことはありません。

出典：「雪（1995年4月号）」神戸市消防局広報誌『雪』編集部

地域のイベントに防災を盛り込んだ楽しい活動もあります

継続性のある自主防災活動、多くの参加者を集める自主防災活動を成功させている事例とは・・・？ 教育PTA活動、福祉活動、環境保護活動、青少年健全育成活動、防犯活動、地域のお祭り行事などを自主防災活動と組み合わせて、また、このような地域活動を行っている他の団体、企業などと協力して、日常性を大事にしながら、楽しみながら、地域の人同士がふれあう中で自然な形で地域防災力を高めている例が多くあります。

ここでご紹介するのは、地域の通常の行事、活動の場を活用し、自主防災活動を地域の人々の関心事にすると共に、その中で実際に自主防災活動の一部の体験をもらうことに成功した活動例です。

また、これらの事例は、NPO活動に従事する人々、ボランティア活動をする人々、地元商店会の人々、環境保護活動に携わる人々など、他の地域活動などを展開している人々と効果的に連携した活動でもあることに注目していただきたいと思います。

<事例紹介>

1. 地域防災を支えるひとづくり
[春日井市のボニター]
2. 商店会による街づくり運動の一環としての防災活動
[早稲田商店会]
3. サバイバルキャンプなどの実施
[世田谷区まちなかの会]
4. 自主防災組織とNPOとの連携による防災活動
[南品川六丁目・東京災害ボランティアネットワーク]
5. 災害経験を活かした自主防災活動
[伴地区自主防災会連合会]

地域防災を支えるひとづくりの例

活動の目的：

愛知県春日井市では、防災・防犯など地域の市民生活に関わる幅広い安全について考え、実践する人材-ポニター（ボランティア+モニターの造語）の育成を目指した市民大学（春日井市安全アカデミー）を開校している。ここでは、災害時における市民活動のリーダーとなることが期待出来る人材を計画的に養成することを目的に各種「防災コース」を設けている。

活動の内容：

ここでは、以下のようなコースを設け、地域の防災を支える上で重要な「ひとづくり」への取り組みを行っている。

①基礎教養課程「防災コース」：防災を中心とした基礎知識

- ・災害医療システム
- ・災害とボランティア
- ・被災者の心のケア
- ・防災情報システム等

②基礎教養課程「生活安全コース」

③専門課程「防災コース」：基礎教養課程「防災コース」を卒業した人を対象に、より高度な防災知識の習得を目指したもの

春日井安全アカデミーカリキュラム

「安全学部」基礎教養課程 防災コース				「安全学部」専門課程 防災コース			
日時	会場	講師	内容	日時	会場	講師	内容
7/31(土) 14:00～ 15:30	春日井市役所	日本赤十字社 組織推進部青少年課長 堀 乙彦 氏	子どもの安全と災害 ～学校・地域社会と災害	7/31(土) 14:00～ 15:30	春日井市役所	名古屋工業大学 システムマネジメント工学科教授 谷口 仁士 氏	東海地震に対する理解と備え
8/3(火) 14:00～ 15:30	春日井市役所	㈱ライフ・カルチャー・センター代表取締役 澤登 信子 氏	人と人がつながり合う街づくり～人と情報と空間のあり方を探る	8/5(木) 14:00～ 15:30	春日井市役所	京都大学防災研究所 巨大災害研究センター長 河田恵昭 氏	被害を小さくする危機管理
8/20(金) 14:00～ 15:30	文化フォーラム春日井	富士常葉大学 環境防災学部教授 重川 希志依 氏	市民が主役の防災まちづくり	9/7(火) 14:00～ 15:30	文化フォーラム春日井	(公開講座) 防災情報機構会長(元NHK解説委員) 伊藤 和明氏	東海地震に備える
9/10(金) 7:00～ 18:00	阪神方面視察	長岡造形大学 造形学部教授 平井 邦彦 氏	阪神・淡路大震災	9/13(月) 14:00～ 15:30	春日井市役所	筑波大学 心理学系講師 堀越 勝 氏	危機介入～被災者のこころの痛み
9/25(土) 14:00～ 15:30	文化フォーラム春日井	東京大学 工学部教授 小出 治 氏	防災通信ネットワーク～情報通信機器による新しいまちづくり	10/3(日) 14:00～ 15:30	文化フォーラム春日井	東京都立大学大学院 都市科学研究科教授 中林 一樹 氏	防災まちづくりを考える
10/6(水) 14:00～ 15:30	春日井市役所	京都大学防災研究所 巨大災害研究センター教授 林 春男氏	被災者の心のケア～阪神大震災における試みとボランティア	11/19(金) 14:00～ 15:30	春日井市役所	同志社大学 文学部教授 立木 茂雄 氏	ボランティアと行政の協働関係
12/6(土) 14:00～ 15:30	勤労福祉会館	名古屋大学大学院 環境学研究科教授 福和 伸夫 氏	東海・東南海地震と耐震対策	12/6(土) 14:00～ 15:30	勤労福祉会館	㈱アニメックス 常務取締役 防災事業本部長 伊永 勉氏	災害時の自主防災とボランティアのあり方

実施方法・場所：

春日井安全アカデミーという市民大学を設立し、継続して防災に長けた人材を輩出している。各コース共、概ね7回程度の講義からなっており、講師は学識経験者、関係団体代表者などとなっている。

活動の企画・運営：

春日井市では、「各種団体の連携」「幅広い市民の声を反映」「将来を見据えた安全に関する調査・研究の実施」を目的に行政・各種団体・地域住民からなる「春日井市安全なまちづくり協議会」を設立している。本活動は、その協議会が設置した市民大学-春日井安全アカデミーで実施している。

安全アカデミー基礎教養課程防災コース講義風景



本事例の特筆すべき事項・その他：

市民大学のメインテーマを、「市民生活の安全」とし、それに貢献できる人材を教育して、継続的に地域社会に輩出させようという意欲的な取り組みである。防災・防犯等、地域の市民生活に関わる幅広い安全について考え、それぞれの立場で地域のために活動し、安全に関する提言を行える、このような卒業生を「ボニター」というユニークな名称として地域社会の認知度を高めようとするなど、卒業後の活動支援をも視野に入れた好例である。



災害図上訓練住民指導風景

ボニター養成講座（救命講習）風景



商店会による街づくり運動の一環としての防災活動

活動の目的：

「自分達のまちは自分達で守る」の基本の下、「楽しめる防災」というユニークな発想で、東京都新宿区早稲田商店会に集う在住、在勤、在学の人々と共に防災意識向上、持続のための活動を展開。

活動の内容：

楽しくて儲かる防災、という商店会の特色を生かした運動を展開している

- ①防災、環境、福祉、教育など多角的な視点からの意見交換を目的とした ML（メーリングリスト）の活用により、広範囲の人的ネットワーク構築。
- ②街を歩くツアーにより、街を防災という観点から自らチェックして、危険箇所の気付き、災害時利用可能資源のチェックを行い“わが町の防災マップ”の作成を行う。
- ③商店会の顧客サービス管理用として使用する IC チップ埋め込み型のカードを活用した災害時安否確認システムの構想（予定）
- ④高齢者世帯の空き部屋に学生を下宿させようというプロジェクトを実施予定。日ごろの世代間交流は、いざという時の災害弱者支援につながるというもの。
- ⑤震災により被災した場合、全国各地の提携先（例えば、長野県飯山市、新潟県魚沼市（旧北魚沼郡入広瀬村）など約 50 箇所）に疎開させてもらうプロジェクトの実施。これは、震災疎開パッケージと呼ばれるもので、一人年間 5 千円で購入でき、災害の無い場合には、3 千円相当の疎開先候補の名産品がもらえるというもの
- ⑥毎年夏に行なわれる環境を主テーマとした地球感謝祭において、他のボランティア、福祉などのテーマとともに防災活動も取り上げ、防災キャンプ、起震車体験などを行なっている。

早稲田の防災事情

「早稲田って強い？—野球・ラグビー・歌伝、じゃなくて防災のこと—」

■■■■■

最終更新日 2003年8月26日

お知らせ

- ◆今年の感謝祭は、9月15日に開催されます。その中のテーマの一つとして、安心・安全・防災と言うことでやっていきます。
- ◆防災キャンプは、8月の23、24日に開催します。是非参加してください。
- ◆今年の防災キャンプでは、戸塚第一小学校とその周辺で行われます。早稲田川の小学生も参加します。

Copyright(C)2003BOUSAI-WASEDA. All Rights Reserved.

ホームページ

防災キャンプ 待ち歩き



主たるイベント等の実施日時・場所：

1996年に始まった“早稲田いのちのまちづくり”の一環として立ち上げた“エコ・サマー・フェスティバル”の中で実施されてきたものである。これは、近隣大学の夏休み等による“商店会の夏枯れ”対策の一つとして行われた、という経緯があり、したがって、現在も主たるイベントは9月(大学の夏休み中)実施されるが、活動そのものは、年間を通じた通年活動に発展してきている。



地球感謝祭

活動の企画・運営：

早稲田商店会が中心となって進めているものであるが、運動は、同商店街と関わりのある全国の商店街との連携によるものに進化してきている。この活動を通して“全国商店街震災対策連絡協議会”が平成14年4月に結成された。



防災キャンプ開会式

本事例の特筆すべき事項・その他：

商店会の振興と、近隣に在住、在勤、在学するまちの人々たちの“楽しめる防災活動”の両立を目指したところに、商店会らしいユニークさがある。また、この活動を通じ早稲田大学の学生が、防災の重要性を認識し、消防団に加入するなど、その活動は、特筆すべきものがある。



防災ミニ集会



年末防災イベント(ガラス飛散防止フィルム展示)



エコ・ステーション

サバイバルキャンプなどの実施例

活動の目的：

世田谷区赤堤は3本の私鉄軌道に囲まれた住宅地域で、災害時、消防車・救急車等が容易に入ってくるのが難しい状況にあり、かねてより自主防災が強く求められる地域であった。平成6年度より、「まちなかの会」を結成し、将来の町の担い手になるであろう“子供たち”を対象に“防災活動の向上”を目指した活動を行っている。

活動の内容：

ここでは、兵庫県南部地震の教訓に学び、「助け合おうみんなのまち」をテーマにキャンプ体験の中に防災訓練を取り込んだ「まちなかキャンプ」を柱とした活動を行っている。

具体的には、次のような活動がなされている。

○まちなかキャンプの実施：

地区内にある公園で子供たちが実際にキャンプを行い、その中で、各種防災訓練を体験するものである。訓練の内容は下記のようなものである。

- i 煙中避難訓練
- ii 初期消火訓練
- iii 応急救護訓練
- iv ロープワーク
- v 起震車体験
- vi 防災クイズ
- vii 非常食体験等

実施方法・場所：

毎年5月第2土曜・日曜日に地区内公園で、小学3年から中学3年までの子供たちとスタッフ（まちなかの会会員、地域住民）など約150人ほどで実施している。

活動の企画・運営：

当初は、地域の世話好きな有志が集まり、運営していたが、その後“まちなかの会”結成後は、地域住民の“まちなかの会”会員が主導して活動を運営している。なお、実施にあたっては地元商店会等の協力支援、消防署、消防団等の指導を受けている。

本事例の特筆すべき事項・その他：

“まちなかの会”という地域住民が運営するボランティア団体を結成し、その活動資金等を地元町会、自治会、商店会等の支援を仰いだり、会が地域のお祭りで模擬店を出し収入を得たりするなど地域ぐるみの活動にしている点が特徴である。

また、将来の地域における防災の担い手としての子供に焦点を当て、それを地域が支える、という明確なスタンスを持っていることや、地域内の身近な公園を訓練場所として活用している点も特筆すべき事項である。



地域防災協力校



サバイバルキャンプ (ロープワーク)



サバイバルキャン



初期消火訓練



子供による消火訓練



煙中避難訓練



救命訓練



起震車体験

自主防災組織とNPOとの連携による防災活動の例

活動の目的：

南品川6丁目に住む住民が、自らの住む街を知り、そこで共に生活する人々と知り合う機会を持つ、という目的の自治会行事(町会創立55周年記念事業)の中で“自らの町を守るための防災活動を体験してもらおう”活動を実施

企画・準備会議



活動の内容：

災害に備えた様々な体験コースの提供

- ①実際に街を歩いて危険箇所の発見、災害時に利用できる施設・設備等の確認、避難経路の確認等を行い、そのまとめとして“わが町の防災マップ”を自分で作ってもらう
- ②被災時には、どのような被害が発生し、街はどのような状況になるかを自ら想定してもらい、そのようなときに減災のために何をすべきか、あるいは何が出来るかなどを考えてもらう
- ③災害時の負傷者等を想定し応急救護の訓練および、そのような場面を想定した応急救護体験をしてもらう
- ④災害時、家の倒壊等で居住できなくなったことを想定し、身近で災害時にも取得が容易な、例えばダンボールなどで簡易ダンボールハウスをつくる体験をってもらう
- ⑤災害時を想定し、身近に発生した負傷者を救護施設に搬送する体験を実際に行ってもらう
- ⑥災害時サバイバル技術取得の一環としてロープワークの学習・訓練をってもらう
- ⑦災害時サバイバル技術取得の一環として、参加者全員で炊き出し作業訓練をってもらう



防災まち歩き



実施日時・場所：

日曜日の朝9時30分から午後2時まで

主会場を地元小学校とし、コースによっては、小学校を基点として町内各所へ出掛けて活動を行った。なお、炊き出し作業訓練は、小学校に全員戻り、一緒に実施した。

活動の企画・運営：

自治会から、「東京災害ボランティアネットワーク」(以下、「東災ボ」といいます。) に対する協力依頼に応えたもの。活動の企画・運営の主体はあくまでも自治会が担い、それを東災ボが黒子役で支援するという形をとった。具体的には、

- ・ 企画は、自治会と東災ボが協力して検討・策定
- ・ 訓練等で使用するプログラム、教材等は東災ボが作成・提供、その他訓練への警察・消防機関の協力要請の仕方等の指導等
- ・ イベントの事務局機能は自治会の責任で実施(集客、会場設営、運営等)

本事例の特筆すべき事項・その他：

地元自治会が発案し、企画段階から、防災活動支援のプロとも言うべき“東災ボ”とのコラボレーションの下、住民にとって適切なレベルの防災活動訓練を実施したという、どこの自治会でも応用できる好例である。

防災マップ作り



炊き出し訓練



お昼ごはん



発表会



災害経験を活かした自主防災活動の例

活動の目的：

広島市安佐南区の伴地区は、宅地のほとんどが山裾の斜面に拓かれており、その多くの住宅が地盤の弱い場所や急傾斜地に面した所に在ったり、土石流危険箇所建っている。このような状況下、これまでも、この地区の3小学校区22町内会の自主防災会連合会による組織的防災活動がなされてきたが、とりわけ平成7年6月29日に発生した豪雨災害を契機に、災害教訓・体験の伝承、危機管理意識の共有など地域防災力強化を図られている。

活動の内容：

ここでは、地域と行政が一体となって「災害に強い街づくり・人づくり」のための広範囲な活動を行っているが、具体的には、以下のようなことを実践している。

- ①自主防災会の連合化：3小学校区22町内会による自主防災会の連合化により、地区全体での災害情報共有化、各地区の協力・連絡体制の強化を目指している。
- ②危機管理意識の高揚：住民の危機管理意識の高揚も目指して各種活動を行っている。
 - ・住民による「わが町地震マップ」の作成
 - ・地区における被災地の実地調査およびそれらの情報の防災行政機関への提供
 - ・災害危険箇所の探査、各町内会における防災マップの作成
 - ・防災関係機関が行う防災フェアや総合防災訓練への地区挙げての協力・参加など
- ③災害危機管理の実践：実際の被災を想定して、以下のような各種訓練等を行っている。
 - ・豪雨、土石流災害を想定した避難訓練の実施
 - ・避難経路の安全性検証
 - ・長期避難生活を想定した夜間宿泊訓練の実施-生活避難場所運営マニュアルの実践



避難訓練状況



炊き出し訓練

子供による消火訓練



負傷者救出訓練

実施方法・場所：

地区そのものを自主防災会の活動の場としており、実践的な活動が地区全体を使って実施されている。またこの地区では、現在概ね月1回のペースで防災に関する何らかの研修会等が開催されている。

活動の企画・運営：

6. 29豪雨災害の被害を深刻に受け止める中、住民間の議論で自主防災活動のあり方についての認識が深まり、実践への流れが作られていった、という経緯があり、活動は住民組織である自主防災連合会が主体となって進められている。また、それに加えて自主防災連合会と行政（とりわけ、地元消防署）との良好な協力関係により、実践的で極めの細かい活動が実現されている。

本事例の特筆すべき事項・その他：

実際に被災したことを糧に、きめ細かく具体的で実践的な災害対応策が検討されていることに、この地区の大きな特徴がある。また、被災状況調査など住民による各種調査活動を通して住民と行政が密接で良好な関係を築き上げていることも特筆すべき事項である。

リーダーシップを発揮する

人の集まりの形態は、「集合」「集団」「組織」と分類することができます。ただの集まりが「集合」、共同で作業をし始めるのが「集団」、役割を決めて効率よく進めていくかたちが「組織」となります。

リーダーとは、「リードする人、先に立って歩く人」という意味です。これに対してフォロアーという言葉があり、これは「後からついていく人」という意味です。リーダーはフォロアーの存在があってリーダーとなるわけです。

一人で行うリーダーもありますが、例えば、効率よく作業を進めるのが得意な人や人の気持ちをとらえて動かすことが上手な人など、それぞれの特徴を生かした複数の人が組んでリーダーシップをとることもあります。

自主防災組織の活動は、地域ごとに様々な組織・形態で行われます。

その活動の目的は、基本的には災害時における重大な被害の発生を阻止したり、不幸にして起こってしまった被害を出来る限り軽減させたりすることにあります。そのためには災害の起きていない普段における準備と、実際に災害が起きたときの適切な行動が重要となります。

このような目的を持つ自主防災組織には、当然ながら十分な資質を持ちリーダーシップを発揮できるリーダーの存在が不可欠となります。

ここでは、自主防災組織の活動を支えるリーダーの資質、主要な役割、その他のポイントなどについてみてみましょう。

<コラム> 自主防災組織指導者講習会の結果 (宮城県消防学校 H16.11.23.~24)

このテキストを作成するにあたり、テキスト案を用いて講習会を開催しました。そのとき参加された方に「リーダーの後継者がいない」という悩みをお持ちの方がおられました。

一方、「このような重要な勉強会は、地域から2名ずつ参加するようにすれば、地域に帰って、相談しながら組織運営ができる。」とのご意見がありました。リーダーは複数いてもおかしくはありません。講習会だけでなく、訓練やイベント開催にあたって、複数のリーダーが企画・立案することで、後継者育成の一助にはなるのではないのでしょうか。

また、人と防災未来センターで行われている市民向けの研修では、ワークショップなど受講者一人ひとりの積極的な参加を求める時間を長くすることで、受講者間の交流促進を図っていますが、その成果の現れの一つとして、受講者同士が自主的に連絡先を交換し合うようになり、研修終了後もメーリングリストを立ち上げるなどして互いに情報交換が行われています。また研修を通じて生まれた人のネットワークが、実際の災害救援の場面で活かされたという報告もあります。

せっかく講習会に参加されたのですから、主催者が準備したカリキュラムをこなすだけではなく、講座を通じた人間関係も積極的に活かしていくことを考えてみてはいかがでしょうか。

さらに主催者側も、講座の内容を深め、講座で培われた人間関係を維持・強化していくフォローアップの講習会を企画したり、さらには講習会の卒業生に、その後の講習会の企画・運営に参画してもらう機会を提供したりしていくことなども、後継者育成の有効な方法であると言えるでしょう。

リーダーの役割

自主防災活動は、平常時、災害時、復旧・復興時に分けられます。また、その活動内容は多岐に渡ることが予想されます。そして置かれている環境や構成員の数や特性などに応じて変わります。

このような活動を主導するリーダーには、自主防災組織の様々な活動目的の達成のために、幅広い能力や臨機応変な対応力などが求められます。また、自主防災組織の組織運営に必要なリーダーシップと災害現場におけるリーダーシップの発揮の仕方も異なります。

これらの現状を踏まえると、リーダーシップの発揮は必ずしも、ある一人のリーダーに期待するのではなく、自主防災組織に集まる、防災に関心が高く防災知識・技術を持った複数の人々がある時々において適切なリーダー役を果す、という考え方が現実的です。

また、リーダーには、新たなスタッフ（リーダー集団の構成員）を発掘していくことも大切な役割となります。

この基本的考え方に立って、リーダーの役割について具体的に示すと次のようになります。

<リーダーの役割>

【通常時】

- 自主防災組織の組織維持、運営マネジメント
- 自主防災組織の活動の主導
 - ・ 緊急時の活動方針の策定、活動体制の構築の主導
 - ・ 平時の防災訓練・活動の主導
- 地域住民の防災への関心の維持・確保
(地域から信頼される存在となること)
- 自主防災組織の活動の評価、是正

【災害時】

- 災害現場における的確な状況判断
- 組織成員への適切な情報提供
- 組織成員への的確な行動指示

【復旧・復興時】

- 復旧・復興に向けた要望の取りまとめ
- 地域の復旧・復興対策、基本の方針策定に向けた合意形成への主導

リーダーを務めるにあたって

- リーダーはどのような時期、状況下であるかに関わらず常に自主防災組織の成員との間において適切なコミュニケーションが図れるものでなければなりません。
- リーダーは地域と共にあり、共に成長する存在です。
- 地域を大切に思い、地域活動を楽しみ、盛り立てていこうという姿勢が大切です。
- 地域防災力の向上には時間の掛る息の長い活動が求められます。したがって、リーダーは拙速な成果を追うことなく、自主防災組織の防災力向上に資する着実な成果を目指して辛抱強い活動をする必要があります。
- 小さな成功事例の積み重ねが、次の活動への意欲につながります。

＜リーダーシップ発揮のための 三つの基盤＞

自信

：地域をよく知ることと地域を大切に思う心が自信につながります。

防災知識・技能

：地域の災害、防災についての知識・経験習得、訓練による災害被害軽減技能の蓄積などを通じて防災の“知恵者”となることも人から信頼されるリーダーの資質の一つになります。

指導能力

：指導力の基礎は、成員との的確なコミュニケーション力です。相手の要望・状況を適切に把握し、かつ自らの考えを相手に的確に伝えることが重要です。それが出来れば十分な指導力を持った立派なリーダーとなれます。

＜コラム＞ リーダーの資質

自主防災組織のリーダーやスタッフに求められる資質としては、次のようなものが挙げられます。

「気配りができる」「忍耐強い」「行動する時は先頭に立つ」

自主防災組織の活動は、平常時に訓練などを積み重ねて地域防災力を向上させていくことがメインとなります。円滑に活動を進めるためには自主防災組織の構成員に理解を得られるよう十分にコミュニケーションをとる、すなわち「気配りができる」ことが求められるでしょう。また、活動を継続するためには「忍耐強い」ことが必要で、さらに、訓練など企画運営するためには「先頭に立って」行動していくことが求められるでしょう。

教育技法の基礎知識

自主防災組織のリーダーとして、住民に様々な知識を身につけてもらい、活動を進めていく場面は多くあります。

良い教育を行うには、まず第一に、良い教師が必要です。指導の「こつ」をおさえた人に習うと、やる気が出て、その勉強が好きになる。興味がわいてきて、教師の言うことがよく分かるようになり、さらに向上します。

では、良い教師・指導者になるには、どうしたらよいのでしょうか？必要なのは、人を教え育てる豊かな経験です。しかし、ベテランになるためには相当な時間がかかります。

そこで、次に必要になるのは、理論と技術です。ベテランの技術を科学的に分析し、誰でもそれを習得すれば、より効果的な教育がおこなえるようになります。ここでは、指導する際に役立つと思われる教育技法について具体的にみていきましょう。

○ 教える前に必ず確認すること…

レディネスの確認：分かるところから指導していきましょう。

勉強は積み重ねであり、学習者には新しいことを身につけるだけの最低限の基本的理解力が備わっていることが求められます。このことをレディネスといいます。レディネスは、知識・経験・態度・技術・身体条件などを含んでいます。最初に土台の確認です。

たとえば、いくら教え上手のベテランの先生でも、一桁の足し算を習っていない子どもに、二桁の足し算を教えることは不可能です。

知識や技術の学習は、一步一步、分かったところを土台にしてのぼっていきます。新しいことを身につけてもらう場合、いきなり難しいことから教えずに、誰もが分かっているところを確認しながら、順々に教えていくことが重要です。

○ 最初と、最後が、一番大切…始めと終わりが一番記憶に残りやすい。

60分や45分などの限られた時間で教える場合、大切なポイントを最初と最後にまとめてあげると効果的です。

最初の時間帯は、何の話をするのかと関心を持っているため、集中力があり比較的記憶に残りやすい傾向があります。見通しがもてるように話の要点をここで押さえてあげるといいでしょう。

最後の時間帯は、一番新しい記憶となります。そのため、まとめをおこない、学習内容の整理と確認をすると効果的です。

○ 内容は、少し難しいくらいが一番やる気ができます。

誰でも関心のあることは積極的に取り組みます。自分に難しすぎる内容や、逆にやさしすぎる内容、好奇心をくすぐらない内容では、意欲は生じません。

学習は、「やる気が起きないために、できない。」場合よりも、その内容が、自分にとって、「やさしすぎ」たり、「難しすぎ」たり、「面白くない」から、やる気が起きてこないことが多いようです。

指導するときには、学習者の興味、関心、能力の実態を知った上で、それに見合った少し難しいくらいの内容・教材・活動をさせることがコツです。

○ 自分の身近な問題として教えていく…主体的学習の促進のために

受身ではなく、積極的に課題に取り組みさせるためには、学習者の身近な問題・課題・関心事からスタートし、「自分の問題」として意識させ、学習者のペースで展開させることが大切です。

人の話を聴く場合、自分に関係のある事柄は、真剣に取り組みますが、自分に関係がないと知った瞬間から、急速に関心が下がっていきます。

教えようとする事柄が、決して他人事ではなく、自らにとってきわめて重要なことであると意識させ、そのことを、きちんと言語化して伝えることは必要です。

○ 見通しが大切

どこまで行けばゴールなのか？

到達目的地を、知っているのと、そうでないのとでは、頑張る力の配分が異なります。マラソンはゴールがあるから持てる力を配分し、最高を目指すことができます。

学習場面でも同様で、これをしたらどんなゴールに達せるのか、そのゴールはどのくらい先か、今、自分のいる位置は、等々、明確に意識しながら確認しながら進めることが求められます。

学習の目的と見通しを常に明示してあげることは大切です。

○ 学習結果の評価を知らせる：教えっぱなしで終わらない。

学習結果の評価を与えることをフィードバックと呼びます。フィードバックは、本人に早く伝えられるほど有効です。

学習の過程で、自分のできていることと、できていないことを知ることは、とても大切です。出来ていれば自信を深め先に進めます。出来ていなければ、そこをさらに深めていきます。適切な評価は、次の自分の行動を正確にしていく手がかりとなります。

人に教える場合、教えっぱなしで終わってしまわず、きちんと正確な評価を具体的に与えることによって、間違った学習を即時停止し、正しい学習を深めていくことが可能になります。

○ 個性に応じた教え方…適性処遇交互作用

学習者の性格に応じた教え方があります。同じ内容を教えるときでも、積極的で前向きな人に教える場合と、恥ずかしがり屋で引っ込み思案な人に教えるのとでは、効果的な指導法が異なることが分かっています。

有名な実験があります。大学の物理学の授業で、性格が内向的な受講者にはビデオなどの映像を利用した形式が効果的で、また、外向的な受講者には教師が直接、質問して答えさせることも含む講義形式が適していることが証明されています。

人の性格に応じたそれぞれに適した教え方がありますので、人柄を見ながら教えていく工夫も大切です。

○ 最初の勇気づけが有効…評価基準

だれでも初めて習うことには不安がつきものです。自分に出来るのだろうか、失敗したくないなあなど。その不安が学習の意欲を低下させないようにすることが求められます。そのために、わずかな進歩でも見られれば最初の頃はしっかりとほめてあげることが重要です。

しかしだんだん進んでいくごとに、ほめる基準を徐々に高めていきます。最初から少しずつ評価基準を上げていくことが、有効な学習効果を得ることです。

○ 教育する上で最も重要な知見「はじめに良いイメージありき」…ピグマリオン効果

「教師の期待効果」とよばれ、教師が「できる」と思っている者は伸び、「ダメだ」と思っている者はダメになる。秘かに抱く期待によってその人間

の能力に、変化が生じる現象を、ピグマリオン効果といいます。指導者が、学習者に、すばらしい可能性を秘めている者として「心から納得した理想的イメージ」を抱くとき、教育効果が高まっていきます。

これは、昔、ギリシア神話におけるピグマリオン王が、大理石の美しい女人像に恋して、現身に変えたいと毎日、熱烈に期待したことによって、その願望を果たした故事にたとえて名づけられました。

期待したように現実がそのようになっていくことを意味しています。

この現象が起きる理由は、教師が学習者に、能力や学業について期待感を抱くと、教師は無意識のうちに積極的に上手にしていぬいに扱い、それによって学習者に自信・意欲が生まれ、持っている能力をのびのびと伸ばすようになるからです。すべての教育場で最も求められるものであるといえます。

<コラム> 阪神・淡路大震災における震災後関連疾患の特徴

～神戸協同病院の3か月の記録より～

震災後4週間で、入院患者のうち、避難所からの入院患者の率は、肺炎と気管支炎併発(68.9%) 気管支喘息(80%) 肺気腫(75%)と、避難所との関連が強い疾患は呼吸器疾患でした。寒冷、過密な集団生活、砂ほこり、栄養不良等厳しい生活環境がその背景にありました。

その他の疾患でも、その比率はほぼ50%で、全入院患者についてみても57.8%と高い率を占めております。

また、在宅患者さんを調査した結果、避難所へ避難した人は1週間目までは15人いましたが、3週間目には、2, 3人に激減。1週間目で3人の方が入院されましたが、いずれも重症でした。

出典：「おまえらもはよ逃げてくれ～神戸協同病院3か月の記録(上田構蔵 著)」

説得技法

自主防災組織のリーダーとしては、住民を説得して活動を進めていかなければならない場面に立たされることもあるでしょう。ここでは、地震発生からしばらくの間の混乱状況において役立つと思われる説得技法について見てみましょう。

○説得者の信憑性（専門性と信頼性）：

信憑性が高い人からの話ほど説得されやすい現象があります。

ですから、リーダーとしていざという時に住民の協力を得るためには、普段から地域の皆さんとコミュニケーションを取りながら信頼の醸造をしておくことが大切です。

また、地域の防災に関する情報（災害時に援護の必要な方の情報、地域の危険箇所など）の把握に努め、専門知識を積極的に学ぶなどして専門性を高めておくことでより適切な判断ができ、住民から一層信頼を寄せられるようになるでしょう。

○イメージ効果：

人間は、パニック時において、理性に訴えるよりも、イメージなどの感性に働きかける方が説得に乗りやすい傾向があります。

このため、例えば避難所において住民が寝起きする場所を確保しようとするときに、「ご高齢の方などを優先してください」と一般論で呼びかけるのではなく、次のような実例を挙げてイメージに働きかけると納得してもらいやすいでしょう。

「阪神・淡路大震災では、地震そのものからは生き延びることができたも

の、その後の避難生活で亡くなった方が1,000人近くおられました。これらの多くは高齢の方でした。その原因についてはいろいろあったと思いますが、一説には、年齢が高くなるとトイレが近くなるのでトイレ近くの衛生条件の良くないところに場所を確保されたり、トイレへ行くことを控えたりして体調を崩された方が多かったためと言われています。このような時だからこそ、互いに思いやって場所を決めていきませんか。」というように。

○一面提示と両面提示：

両面提示はいい面と悪い面の両方を教えて説得する方法です。これに対して、一面提示はどちらか一方だけで説得する方法です。混乱状態にある場合や問題意識が低いものへの説得は、一面提示の方が効果的です。

地震発生からしばらくの間は混乱した状況となり、住民から様々な要求が出てくるのが予想されます。このような時には、両面提示をしようとして、選択の余地がなくできないことに関して「ちょっと調べてきます」とその場しのぎで答えるのではなく、できること、できないことをその場で伝える一面提示を行うほうがよいといえます。

例えば、避難者が20人のときに弁当が10食分しか得られなかった場合には、「10食しかありませんが、これをどう分けるか考えてください。」と言ったほうがよいでしょう。「あと10食来るか調べますが・・・」と言葉を濁してしまうと、残りの10食を調達できなかった時には、さらなる混乱を招きかねません。

○「集団」から「組織」へ

ただ人が集まっているだけの形態を「集合」、共同で作業をし始めるのが「集団」、そして、人々の役割や決まりを決めて作業を進めていく形態が「組織」であることは先に説明しました。

「集団」から「組織」へと一歩形態を進めることで、住民の納得が得られやすくなる場合があります。

まず、「集団」にいる人々には次のような傾向が見られます。

集団への同調：

**集団に影響されて、自らも意識せず
に行動化してしまう傾向があります。**

集団極性化：

決定が一人で考えるよりもより極端な方向（より危険な方向や、より安心してしまう方向）へ移行します。

集団行動無責任化：

緊急時には自ら何をすべきかを、常日頃から認識している、あるいは、認識させていなければ集団としての行動が無責任なものとなります。

このような「集団」にきちんとした行動を行わせるためには、適切な知識や経験を背景とした強いリーダーシッ

プが求められますが、災害が発生し混乱する中で、リーダーシップを発揮しトラブルに対応していくことはなかなか難しいと考えられます。リーダーとしては一体どのようにすればよいのでしょうか。

阪神・淡路大震災では、班（すなわち「組織」）をつくることで避難所におけるトラブルを回避することができた例があります。

例えば、避難所に全員分のお弁当が届かなかったとき、一部の人に配るより、いっそ誰にも配らないほうがトラブルにならないのではないかと判断に迷う場合であっても、班をつくっておいで、各班に3個ずつ配れば、班内での配分は班ごとにルールを決めて行うようになったそうです。また、体が弱い人（乳幼児や高齢者等）から優先的に食事を手渡す（食べて頂く）、班内のみんなに均等に配分する・・・といったように、班の中でみんなで決めたルールはきちんと守る、ぬげがけはできない、という状況になるようです。

このように人々の集まる形態を「集団」から「組織」に進めることでトラブルを回避することができる場合があるのです。

<コラム> 住民に納得してもらえるトラブル解決の3つのポイント

～阪神・淡路大震災時に、避難所となった学校のある校長先生の体験より～

①苦情が出る前にこちらから行く

この校長先生は毎朝避難所内をぐるりと回り、住民の話を聞いて回ったとのこと。このことが後々役に立った。

②相手の話をとことん聞く

どんなにおこっている人でも1時間だまって聞いているとおこるのに飽きてしまう。相手の話を聞いている途中で、「いや、それは・・・」というようなことをいれ始めてしまうと相手もおさまらない。

③話を聞いた後で、できることとできないことがあることをはっきり言う

話を聞いたあとで、その場でできないことはできないと言ったほうがそんなに相手はおこらない。持ち帰って検討する、結局だめでしたということがあると腹を立てることとなる。

出典：「阪神・淡路大震災エスノグラフィー調査」（富士常葉大学）

地域の防災力を高める

地域の防災力を高めるためには、まず、地域を防災の視点でよく見ることです。ここでは、地震に対する地域の防災力を把握するためのポイントを見てください。

さらに、地域の皆さんと一緒にあって、より具体的に危険性に気づき、改

善策を考えるために便利な方法—DIG（災害想像ゲーム）、発災対応型防災訓練—について見てみましょう。

なお、これらの訓練については、防災危機管理e-カレッジの「地域防災の実践コース」に掲載しておりますのでご覧ください。

地震に対する地域の防災力

防災力は「地域の弱点」とこれを克服するための「防災資源」との関係か

ら評価されます。これらの例としては次のようなものが挙げられます。

地域の弱点の発見のために

項目	具体例
<p>・ 地理的弱点とはどのようなものがあるか （被害発生の原因となる条件、避難の妨げとなる条件など）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 急傾斜地等（崖、地滑り地等） ・ 土石流危険渓流 ・ 河川、水路 ・ 貯水池・ダム ・ 低地（浸水頻発エリアなど） ・ 津波・高波危険エリア ・ 隘路、袋小路、橋、トンネル ・ 急坂道、階段 ・ 液状化エリア（埋立地など） ・ 孤立性の高い集落等
<p>・ 人的弱点としてはどのようなものがあるか （自力避難が困難等の要援護者、避難や救出に際して注意が必要な人、隣同士等との人間関係が希薄な人等）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人暮らし高齢者、寝たきりの人、障害のある人 ・ 妊産婦、乳幼児、外国人 ・ 透析等定期的治療必要患者 ・ 病院、介護施設等 ・ 入退去の著しいアパートなど
<p>・ 物的弱点としてはどのようなものがあるか （倒壊危険度や火災危険度、延焼危険度の高い施設、転倒、落下、倒壊した時に危険となる施設、避難の妨げとなる施設、避難の難しい施設、人が集中している施設など）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 倒壊危険家屋（老朽化家屋等） ・ 木造建物密集エリア ・ 石積み擁壁、ブロック塀、石垣 ・ 屋外広告物、自動販売機 ・ 危険物貯蔵所（毒劇物の貯蔵施設等、可燃物等） ・ 高架道路、交通量の多い道路等、鉄道 ・ 駅、大型商業施設、映画館等

防災資源の把握・分析のために

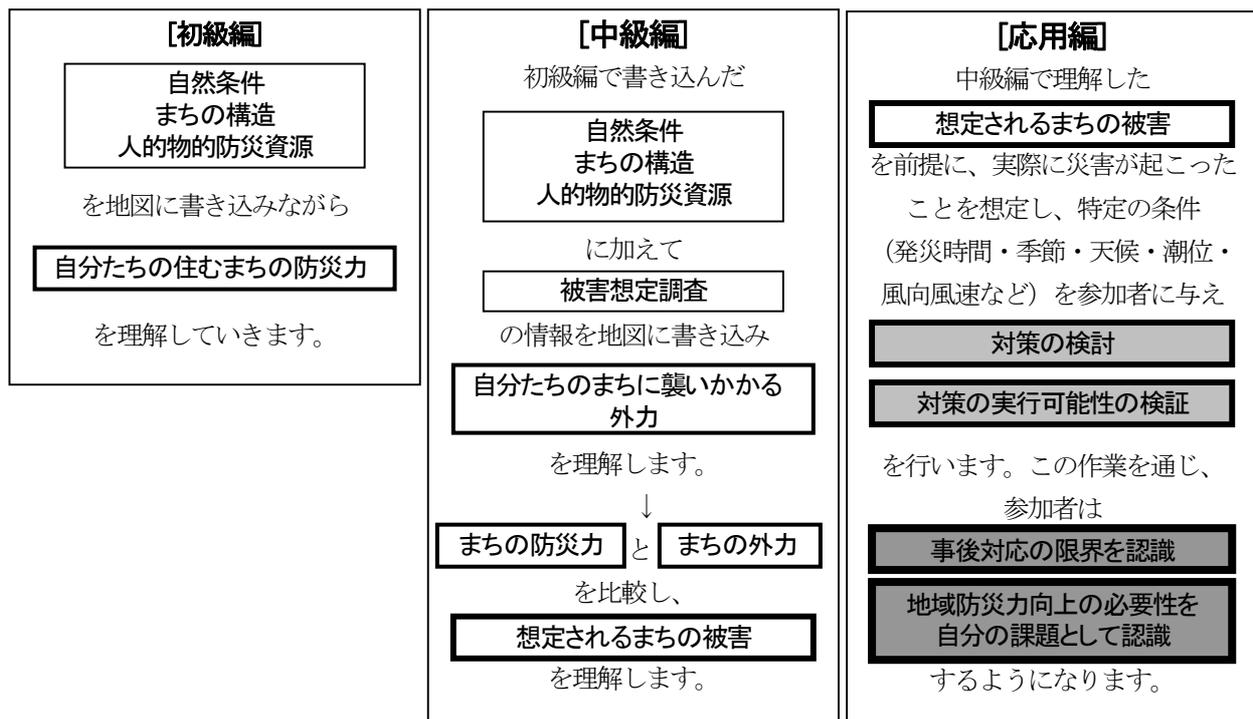
項目	具体例
<p>・人的資源としてはどのようなものがあるか (地域防災に役立つ人材)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・消防職員、消防団員、警察官、自衛官等およびその経験者 ・医療、看護関係者およびその経験者 ・建設業、修理業等の従事者およびその経験者 ・民生委員、児童委員、福祉関係者、通訳(外国語、手話) およびその経験者 ・自治会・自主防災組織リーダーおよびその経験者
<p>・環境／物的資源としてはどのようなものがあるか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・防災行政無線 ・避難地、避難所 ・防災倉庫、備蓄倉庫、消防倉庫 ・食料、日用品、薬品、燃料等の販売店 ・重機等を保有している企業 ・消火器、可搬ポンプ、消防水利(防火水槽・プール) ・貯水タンク、給水所
<p>・社会的資源としてはどのようなものがあるか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・役場、消防署、警察署 ・学校、体育館、武道場 ・公民館、自治会館、社会福祉施設 ・病院、介護施設等 ・ヘリポート、飛行場 ・公園、緑地、キャンプ場等

DIG^{*}の意義 ※Disaster[災害],Imagination[想像力],Game[ゲーム]の頭文字を取って命名されました

DIG（ディグ）を行うと、参加者が地図を囲み、みんなで書き込みを加えながら、ワイワイと楽しく議論するなかで、わがまちに起こり得る災害の姿をより具体的にイメージすることができます。さらに、参加者どうしの距離がいつの間にか近づき、まちづくりをする上でもっとも大切な人と人との関係も育まれていきます。

DIG は1回行えばよいというものではありません。最初は、基本的なマップづくりから始めます。自分たちで手作りの防災マップを作ることによって、地域のことを改めて見つめ直すことから開始します。そして、地域の課題を徐々に見つけて、より具体的な災害対応へと話を深めていくのです。

[参考] DIGを「初級編」「中級編」「応用編」の3段階に分けた場合の進め方として、次のような方法が提案されています。本書では、初級編に該当する内容について紹介します。



DIG[※]（ディグ）を行い、私たちのまちの防災力を確認しましょう

※Disaster[災害],Imagination[想像力],Game[ゲーム]の頭文字を取って命名されました

本節の写真は、H16.11.23～24に宮城県消防学校で行われた自主防災組織指導者講習会の際のもの。

◎準備

事前準備（スタッフが中心となって行います）

- ① DIGのテーマを決める。（例）災害種別：地震、対象地域：〇〇小学校区
- ② 参加人数の見積もり
- ③ 会場の手配・参加の呼びかけ
- ④ 地図^{※1}・小道具類^{※2}の手配
- ⑤ スタッフの役割分担（ファシリテーター(DIG進行支援者)、受付、記録、会計等）

※1 地図（地図によっては著作権者の承認を必要とするものがあります。）

1グループ8～12名とし、グループの数だけ地図を用意します。なお、各グループからの意見発表を考えた場合のグループ数の目安は5～6組です。

対象地域（例：〇〇小学校区）の地図を用意します。地図の大きさは畳2枚大を目安とします。場合によっては拡大コピーをしてつなぎ合わせます。

※2 小道具類

透明シート：地図の上にかぶせて油性ペンなどで書き込みをするためのシートです。透明テブルクロスや家庭用ラップを uses。

油性ペン：透明シートに書き込むためのペンです。「太字・細字」両用の12色や8色のセットを uses。

ベンジンとティッシュペーパー：油性ペンでの書き込みを修正するのに使います。ベンジンの代わりに、マニキュア除光液も使えます。

テープ（セロハンテープなど）：地図や透明シートの貼り合わせ、固定に使います。

ハサミ、カッターナイフ：透明シートなどの切断に使います。

付箋：地図上の表示、意見の書き出しに使います。

カラーラベル：透明シートに貼り、様々な情報を表示します。大きさや色の違いにより情報を区別します。

対象地域の昔の地形図：昔の土地の状況を知るため、必要な場合は国土地理院から入手（有償）します。



当日準備（スタッフだけでなく参加者も一緒に準備を行うとよいでしょう）

- ① 会場設営（テーブルを並べ畳2枚程度の広さの地図台とし、小道具類を用意します。机を使わず床面に直接地図を置く事もあります）
- ② 受付準備

◎DIGの実施

参加者へのオリエンテーション（スタッフからの説明と参加者による地図の準備）

- ① DIG とは何か、スタッフから簡単に説明します。
- ② 進行にあたってのルールをスタッフから説明します。

[ルール例] ・自由に活発に意見交換できる雰囲気をつくるよう互いに意識してみましょう。
・意見をまず聞き、異論があるときは否定ではなく代案を提示してみましょう。
・DIG の中で知れた個人情報保護のため DIG 終了後は他言を慎みます。

- ③ 参加者の自己紹介とアイスブレイキングでリラックス

[自己紹介とアイスブレイキングの例]

a 参加者に紙を配る → b 進行役は参加者に 1 つ質問する → c 参加者は紙に答えを書く
→ d グループ内で参加者が順番に答えの紙を見せて説明する → a～c を何度か繰り返す

◎ 進行役からの質問例：「名前は・どこから来たの・私ってこんなヒト」「今日は、どうして来ましたか?」「私はこんなことをしています」「今日のご気分は?」

- ④ 災害イメージを持つために DIG のテーマに応じたビデオや写真を見ます。
- ⑤ DIG の舞台となる地図を貼り合わせ透明シートをかけます。

[地図を貼り合わせる] 地図の部分貼り合わせて大きな地図にし、テーブルにテープ等で動かないよう固定します。貼り合わせる時は横方向につなげてから縦方向につなげるとうまくいきます。また、テープを切る役、貼る役に分けると効率的です。

[地図に透明シートをかける] かけた透明シートに位置あわせのために地図の四隅の位置を記入しておくことで地図とシートがずれても元に戻せます。

DIGをやってみよう!（参加者自身が行い、スタッフが支援します）

- ① 地域の「自然条件」を確認してみましょう。

○現在の「自然条件」を確認してみましょう。

- ・現在の市街地の位置
- ・海岸線・湖岸線の位置
- ・山と平地の境界線
- ・現在の河川・池沼の位置



○昔の「自然条件」が分かれば地図に書き込んでみましょう。

- ・昔の市街地の位置
- ・昔の河川・池沼は今どうなっているか
- ・昔の水田は今どうなっているか
- ・今の宅地は昔どのような場所だったか



② 「まちの構造」の確認のため、地図を油性ペンでなぞります。

○鉄道を黒色の油性ペン（太線）でなぞりましょう。（工場の引き込み線などの線路軌道も対象にします。）

○主要道路をなぞりましょう。国道や県道など広い道路から順に、路肩を茶色の油性ペン（太線）でなぞります。（街区が目立つようになるはずです。）

○道幅が狭くて消防車が入れないような路地・狭あい道路（幅 2m 以下）を、ピンク色の油性ペン（太線）でなぞります。（ピンクの線が密集している地域は、多くの場合古い木造家屋が密集していて家屋の倒壊危険度が高く、そのため出火危険度や延焼危険度も高く、避難路の確保が難しい地域です。）

○広場・公園・オープンスペース（学校・神社・仏閣、田畑、空き地など）は、敷地の輪郭線を黄緑色の油性ペン（太線）でなぞります。どこに、どのくらいの広さの場所があるかを把握することがポイントです。

○水路・用水・小河川などの自然水利や海岸線を青色の油性ペン（太線）でなぞります。水道が使えなくなったときの、消火用水や生活水の入手場所を把握するためです。

○火災の延焼防止になりそうな鉄筋コンクリート造の建物（ビル・マンション・デパート）の輪郭を紫色の油性ペン（太線）でなぞります。なお、延焼とは1棟の建物の火災が、他の棟の建物に及ぶことをいいます。



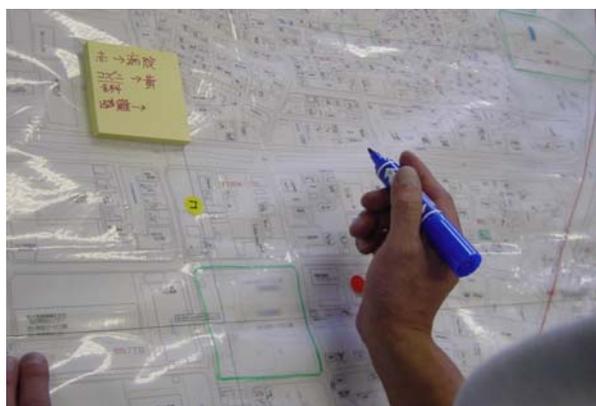
③ 地域の「人的・物的防災資源※」を地図記号により書き込んだり、付箋やカラーラベルを貼って表示します。凡例もあわせて作りましょう。

※ 地域の防災を考える上でプラスにもマイナスにも働く施設・設備、人材を把握します。

○官公署、医療機関などの災害救援にかかわる機関・施設を表示します。

（例）・市町村役場（出張所）

- ・消防署、警察署
- ・学校
- ・医療機関（病院、医院）
- ・公民館、自治会館
- ・社会福祉施設
- ・ヘリポート



○地域防災において役に立つ施設などを表示する。

(例)・防災行政無線

- ・避難地・避難所、防災倉庫
- ・食料・日用品、薬品、燃料等の販売店
- ・重機等を持っている企業
- ・消火器、可搬ポンプ
- ・消防水利(防火水槽・プール)



○転倒、落下、倒壊した時に危険となる設備などを表示する。

- (例)・燃料(石油、可燃性ガス)や毒性の高い物質などが貯蔵されている施設
- ・ブロック塀、石垣など
 - ・屋外広告物、自動販売機



○地域防災に役立つ人材を表示する。

(例)・自治会・自主防災組織リーダー

- ・消防職員、消防団員、警察官、自衛官等やそのOB・OG
- ・医療、看護関係者やそのOB・OG
- ・建設業、修理業などの関係者やそのOB・OG
- ・民生委員、児童委員、福祉関係者、通訳(外国語、手話)

○災害時要援護者のいる世帯の場所を表示する。

(例)・一人暮らしの高齢者、寝たきりの人、障害のある人、妊産婦、乳幼児、外国人

◎まとめ

地図を見ながら考えてみよう！(参加者自身が行い、スタッフが支援します)

① グループごとに地域について気づいたこと(発見)を書き出してみよう。

[書き出すテーマの例]

- ・地域の特徴は？
- ・地域の防災・災害救援についてのプラス要素は？
- ・地域の防災・災害救援についてのマイナス要素は？

※1項目ずつ付箋に書き出します。
重複があってもかまいません。



② グループごとに気づいたこと(発見)について発表し、参加者全員で共有しよう。自らの発見を確認し互いの発見を共有するため、まとめと発表は必ず行いよう。

DIG をきっかけとした「気づき」の例

DIGにより参加者自らが、地域の防災上有利な点・不利な点に気づいていくことが大切ですが、この「気づき（発見）」をより深く多面的なものとし、具体的な防災活動・防災対策に発展させていくきっかけとするためには、自主防災組織のリーダーやスタッフが、参

加者に「他の考え方もあるのではないかと」気づいてもらうよう、異なる視点から問いかけることも重要です。

多くの参加者から多面的な意見を引き出すために、どのように問いかけるとよいか次の「気づき（発見）」の例を参考にして考えてみましょう。

[DIGによる「気づき（発見）」の例]

(例1) [地域の特徴] 中高層の住宅（マンション）が多い地区

[地域のプラス要素] 耐火構造の建物が多く、火災の延焼危険は低い。

[地域のマイナス要素]

- ・昔、沼地であった場所を埋め立てた区域については軟弱地盤のおそれがある。
- ・自然水利が少なく、水は防火水槽、プールから得るしかない。
- ・居住者の入れ替わりが激しく、地域の人どうしの交流が少ないため、防災に役立つ人材がどこにいるか、要援護者がどこにいるか把握が困難。

(例2) [地域の特徴] 木造住宅が密集した地区

[地域のプラス要素]

- ・長く住んでいる住民どうしは互いに顔見知りで、様々な地域活動（防災、防犯、清掃、福祉、お祭りなどの行事）が充実している。
- ・要援護者がどこに住んでいるか、多くの住民が知っている。

[地域のマイナス要素]

- ・木造住宅が密集している。住宅は古いものが多いため、大地震では多くの家屋が倒壊する可能性がある。また、火災の延焼危険性も高い。さらに道路が狭いため、消防車両などの通行が困難。
- ・一人暮らしの高齢者が多いため、避難時する際には周囲の住民の協力が必要。
- ・居住者が頻繁に入れ替わるアパートなどの住民は、他の住民との人間関係が希薄で、地域活動への参加も少ない。

(例3) [地域の特徴] 店舗、事務所が多い繁華街、商業地区

[地域のプラス要素] 商店街の店主どうしは互いに顔見知りであり協力可能。

[地域のマイナス要素]

- ・地震時には、看板や窓ガラスが破損・落下するなどし負傷者が多く発生する。
- ・地域外からの勤務者やお客が多いため、災害時には人々が混乱し、冷静に避難などができなくなるおそれがある。また、帰宅困難者が多数発生するおそれがある。
- ・事務所も含めた地域全体としての協力体制はそれほど強くない。

まちなか防災訓練の意義

「まちなか防災訓練」は、まち中を訓練会場として、所々に仕掛けた「災害」に、住民自らが対応する訓練です。

具体的には、民家の前で火災やけが人を発生させ、これらを知らされていない訓練参加者は、消火器や包帯、担架など、町内会や個人が備えている資機材を持ち寄り、対応します。

災害発生とともに各自の身を守り、自分たちの生活の場で発生した火災や

けが人に対応し、通行不能な道を通らずに避難するなど、この訓練をとおして目の前の災害事象に臨機応変に対処する力が養われます。

建物の被害状況、火災やけが人の発生状況などの想定をいろいろと変化させて「まちなか防災訓練」を繰り返し行うことによって、様々な状況下で対応するといった具体的な体験を積み重ねることができるのです。

まちなか防災訓練に盛り込む訓練の例

地震発生時に身を守る

- ・揺れているときの行動
- ・揺れがおさまったときの行動

初期消火

- ・消火器による消火
- ・バケツリレーによる消火
- ・投てき水パックによる消火 など

救命手当、けがの応急手当、搬送

- ・意識がない人の手当
- ・けが人の手当
- ・応急担架の作成と担架による搬送 など

まちの対策本部の設置

- ・設置
- ・災害に関する情報収集と整理、情報発信
- ・手薄な災害現場への人員配置（コーディネート）
- ・防災関係機関との連携 など

救出・救助

- ・救助資機材を使った救出・救助 など

避難

- ・ガス、電気を止める方法の確認
- ・避難時の服装、非常持出品の確認
- ・通路に障害物があった場合の避難
- ・要援護者の避難 など

<コラム> まちなか防災訓練の結果

(宮城県消防学校 H16.11.23.)

宮城県消防学校で行った講習会では、まちなか防災訓練を体験していただきました。そのとき参加された方の中には、色々資機材を準備する必要があって、自分達だけでは無理かなと思われたかも知れません。

しかし、初回は、消火器のみの初期消火の訓練などと、全ての訓練を一度にする必要はありません。出来ることからやってみて次回はまた違った訓練、例えば応急手当など行えばいいのです。訓練で使用する資機材も必ずしも大きな材木やダミー人形を用意する必要もありません。自分達で用意できるものでも十分に簡単に実施できます。難しい訓練をイメージしないで、実践することが大事です。

まちなか防災訓練を行い、私たちのまちの防災力を確認しましょう

◇準備

事前準備（スタッフが中心となって行います）

① まちなか防災訓練で想定する災害、対象地域、訓練内容を企画

[例] 災害種別：地震

対象地域：〇〇小学校区

訓練内容：各自が身を守る、まちの対策本部の設置、初期消火、救出救助、避難

② 訓練内容の具体化と準備（災害発生場所やまちの対策本部の設置場所の決定、スタッフの配置計画、使用する材料・資機材等の準備など※）

③ 市区町村、消防、警察などの協力機関や協力者へのお願いや交渉

④ 住民への広報（開催日時や事前説明会のお知らせ）

[例] 〇〇小学校区 震災訓練のお知らせ

[対象者] 〇〇小学校区の住民の皆様

[訓練日時] 〇月〇日（日） 午前10時～12時

[訓練場所] 〇〇小学校区全域

[訓練内容] 主に次のような訓練を行います。シナリオは用意していませんので、皆さんがそれぞれ自分にできることを考えて対応することになります。

- ・地震発生時に、各自自宅にて身を守ります。
- ・運営スタッフを中心に「まちの対策本部」を設置します。
- ・〇〇小学校区内で発生した火災の初期消火を行います。
- ・近隣でおきた災害への対応が終わったら、〇〇小学校へ向けて避難を開始します。

◇事前説明会◇ 注意事項などについて説明しますので必ずご参加ください。

[日時、場所] 〇月〇日（日）午前10時～ 〇〇公民館

⑤ 事前説明会（まちなか防災訓練の意義や目的、災害種別、対象地域、まちの対策本部の場所、訓練内容、注意事項、資機材などの点検 など）

事前説明会に参加できなかった住民に対しては、注意事項やルールなどに関する広報を行っておくとよいでしょう。また、災害発生場所付近の住民には了解を得ておきましょう。

※ 災害発生場所等の決定、スタッフ配置計画、材料・資機材等の準備などの例

[まちの対策本部の設置]

まちの対策本部では次のような活動を行う。

「災害に関する情報収集（要救助者や火災の有無など）と整理、情報発信」、「組織の活動状況の把握」、「資機材の貸し出し状況の把握」、「救護所の設置」、「手薄な災害現場への人員配置（コーディネート）」、「市区町村、消防、警察などとの連携（情報提供）」

設置場所：一時的な避難場所となる〇〇広場

スタッフ：地震発生後、町内会の役員〇名が集まり設置

資機材等：訓練対象地域の地図、メモ用紙・付箋・筆記用具、セロハンテープ・ガムテープ、掲示用ボード、リーダーやスタッフであることを示す腕章・帽子・名札など



【初期消火】 火災を発見して 119 番通報を行ったのち（実際には通報するしぐさをする）、消火器による消火とバケツリレーによる消火を行う。

【火災発生場所と時間】：〇〇路地(10:05)、〇〇空地(10:10)

【スタッフ】：地震発生前から各火災発生場所に安全管理係〇名配置

（必要に応じて消火器の使用方法をアドバイスする（消防団員や消防職員の協力を得てもよい）。訓練参加者が消火器を落とすなどして、けがをしないよう注意する。出火点では、火の管理を行う。）

【資機材等】：〇〇路地周辺の街頭消火器を使用してもよいか確認

バケツリレーの水源としては、〇〇銭湯の湯を使用

バケツリレーによって運んだ水をためるポリバケツ(大)を〇〇空地に設置

バケツリレーで使うバケツ(小)は、参加者各自が持参

注) 実際に火を出す場合は、燃やす廃材や消火用の水を用意する。また、消防機関に届出が必要。

火を出さない場合は、表示や発煙筒の煙により火災発生場所を知らせる。



【救出・救助】 救助資機材を用いて救出・救助を行う。

【救出・救助現場】：〇〇広場のがれき下（ダミー人形）

【スタッフ】：地震発生前から、救出・救助現場に安全管理係〇名配置

（必要に応じて資機材の使用方法をアドバイスする（消防団員や消防職員の協力を得てもよい）。資機材使用の際に参加者がけがをしないよう注意する。）

【資機材等】：防災倉庫に保管されている救助資機材、ヘルメット、軍手、がれきに見立てる木材、けがをした場合の救急箱、がれきの下に置くダミー人形



【救命手当、けがの応急手当、搬送】 けが人の応急手当の実施と応急担架による搬送（安全のため、応急手当を行ったけが人役のスタッフではなくダミー人形を搬送する）。意識のない人（ダミー人形）に対する救命手当の実施。

【けが人など発生場所】：〇〇さん宅前（けが人・応急担架による搬送用のダミー人形）、

〇〇ビル前（救命手当訓練用のダミー人形）

【スタッフ】：〇〇さん宅前：けが人役〇人、安全管理係〇人

〇〇ビル前：救出・救助の安全管理係が救命手当も担当（必要に応じてけが（足の骨折）の応急手当と応急担架による搬送、意識のない人（ダミー人形）に対する救命手当の方法をアドバイスする（消防団員や消防職員の協力を得てもよい）。参加者がけがをしないよう注意する。）



【資機材等】：けが人の容態を示したカード（けが人は身に付ける）、応急手当に使用するタオル・包帯、応急担架を作成するための毛布・物干し竿、応急担架に乗せるためのダミー人形、救命手当訓練用のダミー人形

【避難】 避難せざるを得ない状況になったとき、ガスの元栓や、電気のブレーカーをおとしてから避難する。この訓練では、最後に全体反省会を行うため、参加者は近隣でおきた災害対応が終了したのち、〇〇小学校に避難する。近隣の住民どうしで安否確認し、要援護者がいる場合は、付近の住民で協力して共に避難する（要援護者が参加困難な場合、スタッフが要援護者役を務める等でもよい）。一部の通路は通行できない想定とし、迂回路を利用し避難する。



【通行できない場所】：〇〇交差点、〇〇さん宅前の道路

【スタッフ】：地震発生前から、避難路、迂回路のポイントとなる場所に立つ（〇人）
（避難する参加者が事故にあわないよう注意（警察官の協力を得てもよい）。）

【資機材等】：通行止めをする場所に張るロープ、通行止めの表示。

直前準備（スタッフが中心となって行います）

- ① 火災、建物倒壊場所などに資機材を運んで設営を行う。
- ② それぞれの担当スタッフを配置するとともに、協力者（消防団員、消防職員、警察官など）に担当場所についてもらうよう依頼する。

◇訓練実施

【スタッフ側】

- ① 災害発生の合図（スタッフがサイレンを鳴らすなどして対象地域に知らせます）
- ② まちの対策本部へ本部要員を派遣する
- ③ 参加者へ各災害発生ポイントへの対応を呼びかける
- ④ 災害発生ポイントでの安全管理をする
- ⑤ 消防署などの関係機関と協力して災害発生ポイントでの技術的指導をする

【参加者側】

- ① 災害発生の合図によって行動を開始する
- ② 参加者は各自の住宅で身を守る。
- ③ 家族の安否を確認した後、参加者は家の外に出て、まちで発生している火災やけが人に対応する。
- ④ 近隣でおきた災害への対応が終わったら、声をかけ合って避難場所へ向かう。

◇訓練終了時（参加者の点検と全体反省会）

- ① 訓練が終了したら、スタッフは参加者にけがなどはないか確認し、参加者・スタッフともに使用した資機材などの点検・後始末を行う。
- ② 訓練のまとめとして、参加者全員で考えてみましょう！

【話し合うテーマの例】

- ・ 訓練に参加して気づいたことはありますか？（よかったこと、残念なこと）
- ・ 参加者どうしで協力して活動できましたか？
- ・ うまくいった訓練は何ですか？またその秘訣は？
- ・ 課題のある訓練は何ですか？どのような課題がありましたか？
- ・ より災害に強い地域にするための提案をしてみましょう。

まちなか防災訓練をきっかけとした「気づき」の例

「まちなか防災訓練」は、普段の生活の場で、消火、救出・救助、応急手当、避難などを体験することができるため、参加者は自分のまちの有効な資源（災害時に役に立つモノ、人）や課題（災害時に不安なこと）を把握することができます。

このため、有効な資源はいざというときにきちんと使えるように、課題に

ついてはどう改善したらよいか皆で知恵を絞る、あるいは訓練を繰り返す、といった今後の目標が明確になります。

訓練のまとめにおいて参加者から提案された課題を住民全体で改善していくためには、リーダー・スタッフが住民にどのような協力を求めるとよいのか、次の「気づき」の例を参考に考えてみましょう。

【まちなか防災訓練による「気づき（発見）」の例】

【訓練全体について】

- ・自分で考えて行動するところに、この訓練の面白さと、これまでにない新鮮さがあった。

【まちの対策本部の設置】

- ・一時避難場所に速やかに設置されたので、避難してきたときには本部でスタッフが活動しているのを目にすることができ、安心感が得られた。
- ・情報を寄せる住民がごく一部に限られていたため、火災、けが人の状況については一部の地区の情報にとどまってしまった。

【初期消火】

- ・ふだん何気なく歩いている道路に設置されている消火器を記憶していなかったり、意外と見逃していたことに気づいた。
- ・消火器の設置場所前にはたくさんの自転車が路上駐輪しているため、取り出すのに手間取った。
- ・消火器の使い方を理解しているつもりだったが、実際にはうまくできなかった。
- ・バケツによる消火では人手が足りなかったが、それを受けた「まちの対策本部」の指揮により、応援者が集まったので、初期消火に成功した。

【救出・救助】

- ・自分自身の安全を守りながら救出するにはどうしたらよいか、疑問が残った。

【けがなどの応急手当、救命手当】

- ・普通救命講習を受講したことがある〇〇さんが教えてくれたので、救命手当ができた。
- ・骨折などのけがをどう手当してよいかわからず、けが人を見ても何もできなかった。

【避難】

- ・親を背負って避難しようとしたが、体力がもたず、途中で周囲の方に代わってもらった。普段から近所の人に協力してもらえるようお願いしておかなければならないと思った。
- ・普段通っている道が使えない時、どこを通過して避難場所に行けば安全かよくわからなかった。

資料編

住民の興味を引き付ける手法について

地域のリーダーやスタッフとしてイベント訓練の企画・運営を行う際には、できるだけ多くの住民の参加を得、参加者によかった、ためになった、楽しかったと感じてもらいたいものです。

本編では、地域のイベントに防災を組み合わせる事例について紹介しましたが、資料編では、集まった参加者が防災について興味をもつきっかけとなるような実演の例についていくつか紹介します。

<身近な道具を使ったサバイバル技術例>

1. 安全・かんたん手作りランプ（(財) 市民防災研究所）
2. サ・ア・テ ふしぎな卓上コンロ（(財) 市民防災研究所）
3. 「災害・緊急時の簡単料理あらかると」（(社) 富山県栄養士会）

身近な道具を使ったサバイバル技術例 1

安全・かんたん手作りランプ (財) 市民防災研究所

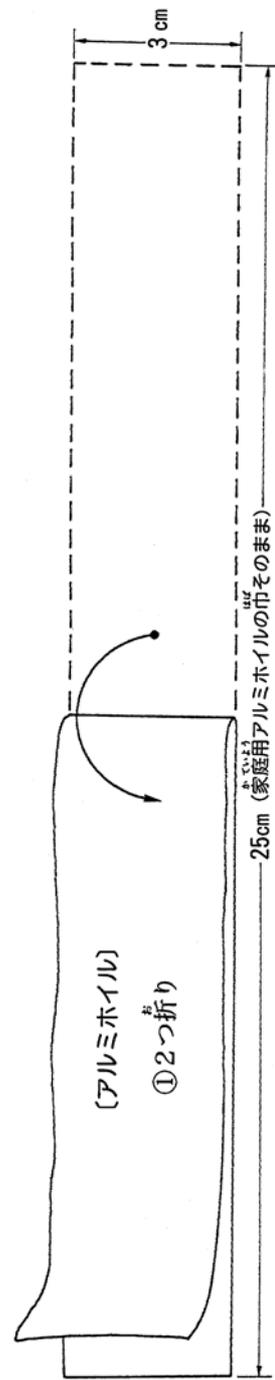
台所にある材料だけで簡単にできるランプです。小学生くらいの子供でも作ることができます。

ランプは、明るさだけでなく暖かさもあり、災害時には心を落ち着かせてくれます。

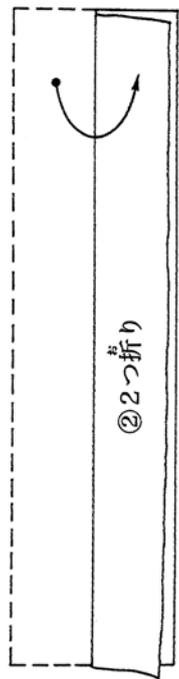


(財) 市民防災研究所 提供





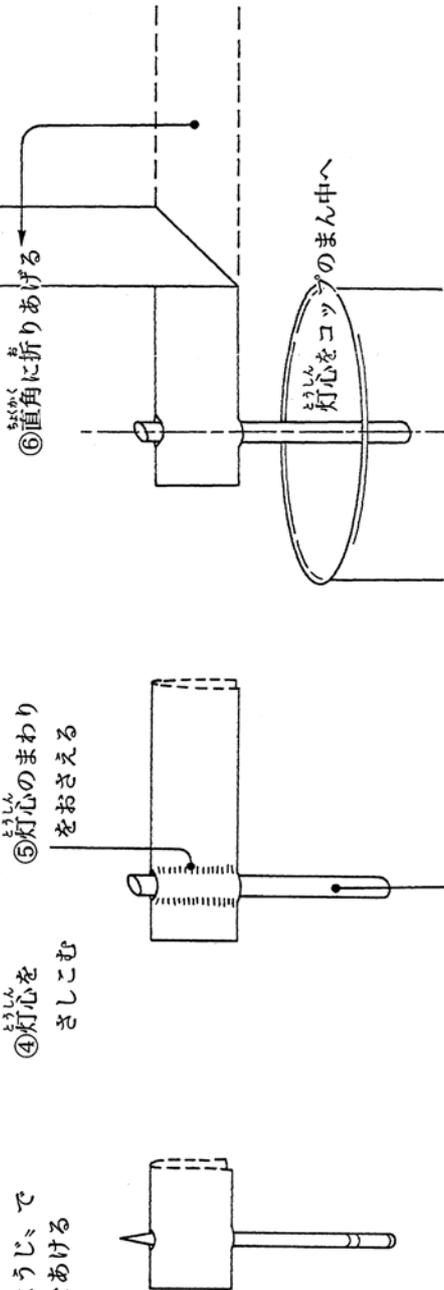
A3 版に拡大コピー (141%) すると原寸大の型紙になります。



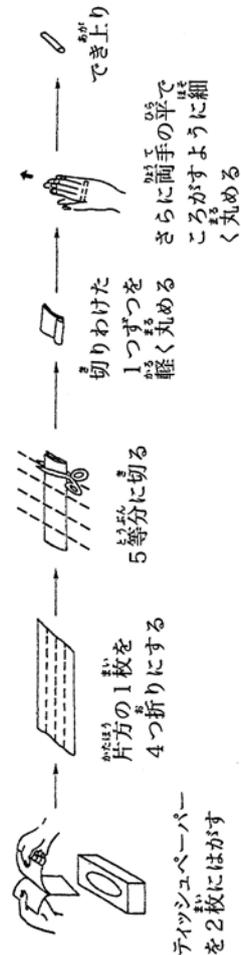
③ ぼうじ、で
穴をあける

④ 灯心を
さしこむ

⑤ 灯心のまわり
をおさえる

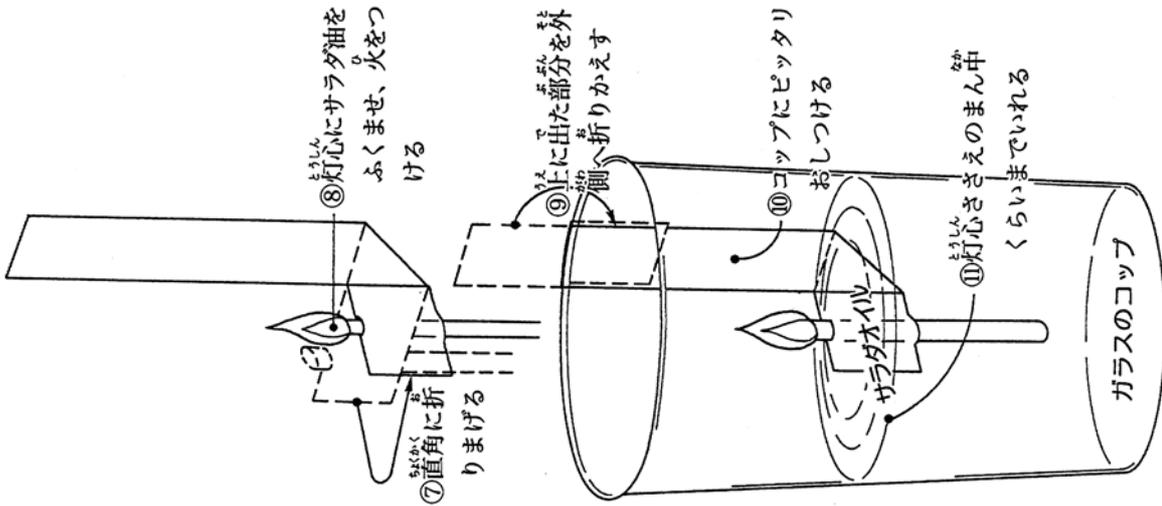


灯心の作り方



安全・かんたん
手づくりランプ

財団法人 SSK 市民防災研究所 ☎03-3682-1090
〒136-0072 東京都江東区大島4-5-14
<http://www.sbk.or.jp/>



※サラダ油には
容易に火はつきません。

身近な道具を使ったサバイバル技術例 2

サ・ア・テ ふしぎな卓上コンロ ((財) 市民防災研究所)

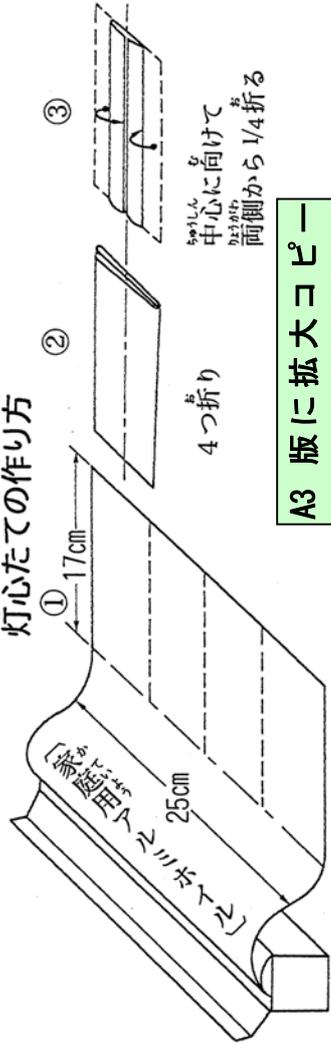
アルミ缶とアルミホイル、ティッシュペーパーだけで作る卓上コンロです。
コンロを作った後に、ご飯を炊いたりホットドックを作ったりするプログラムも楽しいです。



((財) 市民防災研究所 提供)

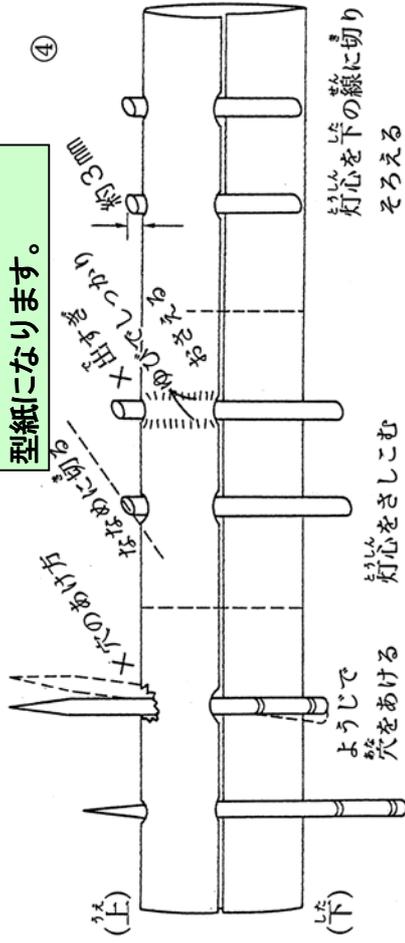


とうしん つか なた かのた
灯心たての作り方



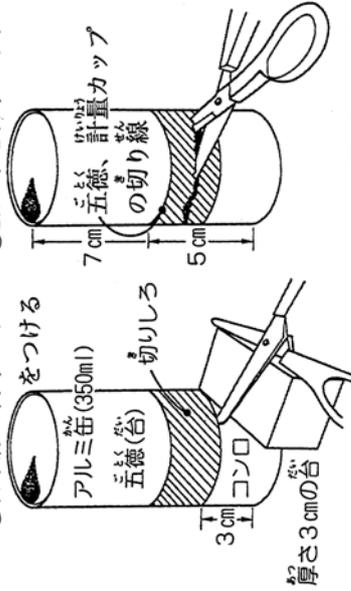
4つ折り
中心に向けて
両側から1/4折る

A3版に拡大コピー
(141%)すると原寸大の
型紙になります。



つか かのた
コンロの作り方

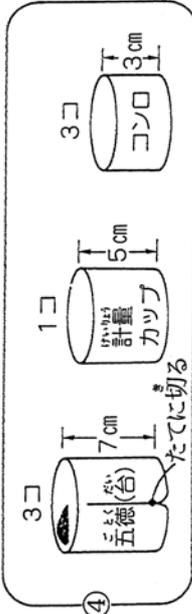
① 切り線の目印のキズをつける



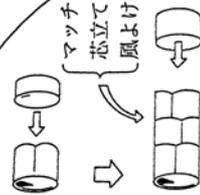
② 上と下を切りはなす

③ 切り線にそって切る
缶の切る面を
左側にむけて
持つ

④



※しまい方



※灯心の作り方は、裏面をごらん下さい。

SAKAI
NEW
NEW
NEW

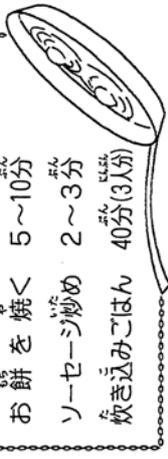
サ・ア・イ
ふしぎな
たくじょう

卓上コンロ

財団法人
SBK 市民防災研究所 03-3682-1090
〒136-0072 東京都江東区大島4-5-14
http://www.sbk.or.jp/

このコンロで作れるお料理の例

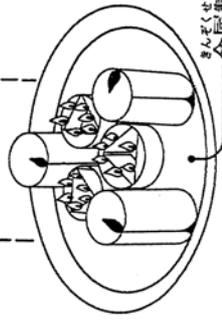
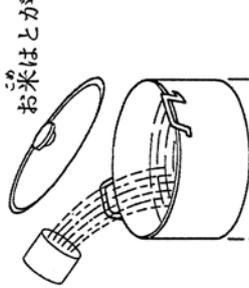
- クレープ 2分
- 茶わんむし 30~40分
- 白玉 4~5分
- ホットミルク 3~4分
- お餅を焼く 5~10分
- ソーセージ炒め 2~3分
- 炊き込みごはん 40分(3人分)



3人分のごはんを炊く時の例



お米はとがずに炊く

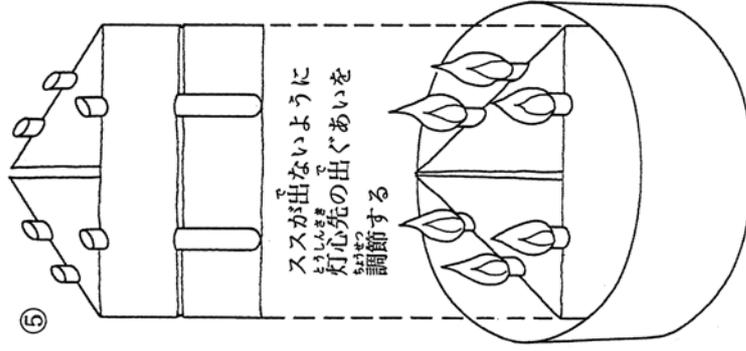


金属製のおぼん

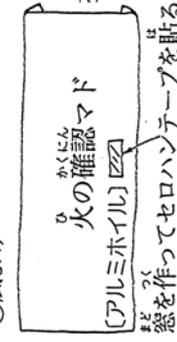
② ナベ、一巻きより大きめに



③ 40分でごはんが炊けます



① 風よけ



折りまげる

窓を作ってセロハンテープを貼る

身近な道具を使ったサバイバル技術例 3

災害・緊急時・キャンプ等で困らない
簡単料理 あらかると

(社) 富山県栄養士会 地域活動栄養士協議会

簡単料理は、防災訓練における体験メニューとして活用するだけでなく、地域のお祭りや子供会での催し等で活用することで、地域住民の防災意識を高揚するチャンス作りに活用できます。



炊き出しご飯 (簡易炊飯袋)

材料 (4人分)

下処理

米……………2カップ
水……………8カップ
簡易炊飯袋……………4枚

1人分

エネルギー 285 kcal
たんぱく質 5.5 g
カルシウム 5.0 mg
塩分 0 g

- 作り方 ① 簡易炊飯袋に米を入れて20～30分煮る。
② 水分を切って15分蒸らす。



- ちよつとアドバイス ● 米は洗わず使え、湯はくり返し(3回程度)使えます。
● アウトドアにも便利。
● 7ページ参照のこと。

炊き出しご飯 (ハイゼックス袋)

材料 (4人分)

下処理

米……………2カップ 洗っておく
水……………2カップ
ハイゼックス袋……………2枚
輪ゴム……………4本

1人分

エネルギー 285 kcal
たんぱく質 5.5 g
カルシウム 5.0 mg
塩分 0 g

- 作り方 ① ハイゼックス袋に米と水を入れ、空気を抜いて輪ゴムで止める。
② 大鍋で20分ゆでて取り出し、ふたつき容器で15分蒸らす。



- ちよつとアドバイス ● 水を加減することによって好みの軟かさに仕上げられます。
● 7ページ参照のこと。

即席雑煮

材料〈4人分〉

切り餅……………8個
みつば……………1/2把 根元を切り、2cm位に切る
お吸い物の素……………3袋
熱湯……………2 1/2カップ

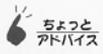
下処理

1人分

エネルギー 189 kcal
たんぱく質 3.5 g
カルシウム 2 mg
塩 分 1.5 g

作り方 ① 餅は焼く。(又はゆでる)

② 器にお吸い物の素、みつばを入れ熱湯を注ぎ餅を加える。



**ちょつと
アドバイス**

- かまぼこや青菜をのせてもよい。
- お吸い物の素は、種類により塩分が異なります。塩分が強いようでしたら量を減らしましょう。

もちのピザ

材料〈4人分〉

切りもち……………8個
とろけるチーズ……………4枚

下処理

1人分

エネルギー 256 kcal
たんぱく質 7.9 g
カルシウム 126 mg
塩 分 0.6 g

作り方 ① フライパンでもちの両面を2～3分焼く。

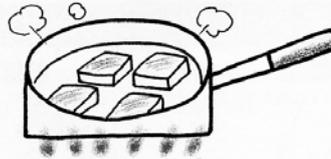
② ①にチーズをのせて3～4分蒸し焼きにする。



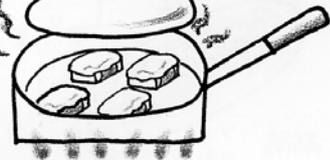
**ちょつと
アドバイス**

- トッピング材料として、サラミソーセージ、スライスサーモン、ピーマン、ハム、キムチ、のりなどを、のせてもよい。
- ピザソースを利用してもよいです。

切りもちも両面焼く



フタをして
3～4分
蒸し焼き



うどんグラタン

材料〈1人分〉

グラタンソース缶……………2缶
茹でうどん……………2玉 熱湯でほぐしながらサッと茹でる
粉チーズ……………大さじ4
バター……………大さじ1
パセリ(ドライパセリでも可)少々 みじん切り

下処理

1人分

エネルギー 330 kcal
たんぱく質 7.2 g
カルシウム 89 mg
塩 分 1.2 g

作り方 ① グラタン皿にバターを塗り、うどんを入れる。

② ①にグラタンソースをかけ粉チーズとパセリをのせ、オーブントースターで焼く。



**ちょつと
アドバイス**

- 粉チーズの代りにとろけるチーズでもおいしい。
- グラタンソースの他、カレーソースやミートソース缶でも応用できます。
- 牛乳1/2カップを加え鍋で煮込むと簡単です。

干し魚のサラダ

材料 (4人分)

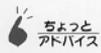
干し魚のほぐしたも…80g 焼いてほぐす
 玉ねぎ……………1/2個 薄く切り、水に放す
 酢……………少々
 ドレッシング
 酢 大さじ1
 油 小さじ1
 塩 小さじ1/2
 こしょう 少々

下処理

1人分

エネルギー 54 kcal
 たんぱく質 5.0 g
 カルシウム 28 mg
 塩 分 1.4 g

作り方 ① ドレッシングを作り、干し魚と水を絞った玉ねぎを入れて和える。



ちよつと
アドバイス

●好んでマヨネーズで和えてもおいしいです。
 ●ラディッシュ等入れると、色どりがよくなります。

豆腐と野菜のみそ炒め

材料 (4人分)

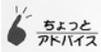
豆腐……………1丁 たて半分にし1cm厚さに切る
 長ねぎ……………1本 ぶつ切り
 ピーマン……………3個 6つ割り
 みそ 大さじ2
 砂糖 大さじ1/2
 (a) 酒 大さじ1
 ごま油 大さじ1
 にんにく 1片

下処理

1人分

エネルギー 105 kcal
 たんぱく質 5.4 g
 カルシウム 91 mg
 塩 分 1.1 g

作り方 ① 中華鍋にごま油を熱し、にんにくのつぶしたものを炒め、香りが出たら野菜、豆腐を炒める。
 ② (a) を入れ少し煮つめる。



ちよつと
アドバイス

●豆腐の代わりに生揚げもよいでしょう。

水が少ない時の調理の工夫

水を大量に使えない時は、普段の調理法の常識から離れ臨機応変に対処しましょう。

作る時

- 洗ったり茹でる水の量、回数は必要最小限にする。
 (たとえば、青菜などは少量の水で振り洗いし無水鍋や電子レンジを活用する。)
- 茹でる材料が多い時は1つの鍋でアクの少ないものから順に茹でる。
- ねぎなどを切る時はキッチンばさみを使う。
- ボールがわりにポリ袋の中で野菜や肉を調味液に漬け込む。
- フライパンやホットプレートにクッキングペーパーをしくと、油を使わなくてもこげつきにくく、洗う回数が減る。
- アルミホイルはオープンやオープントスターの皿や、ホイル焼き、煮物の落とし紙として使う。



食べる時

- 皿にラップやアルミホイルをはり、汚れたら交換する(熱いものは、ラップではなく、アルミホイルを使う。)
- アルミホイルを折り紙のコップの要領で折り、携帯コップとして使う。



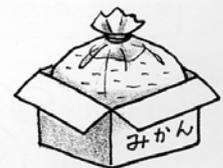
片付ける時

- まな板は充分に洗えない時があるので除菌スプレー、酢を適宜使う。
- 野菜を洗った水、米のとぎ汁などは捨てずに洗いに使う。
- 洗剤がわりにみかん・オレンジ・レモンの皮を利用し、屋外で細かい砂・草や海草をたばねたものを使うとすすぎ水が少なく、環境にも優しい。
- 汚れの激しい時は新聞紙などでふきとってから洗う。
- 屋外で汚水を捨てる時は、川等に直接捨てず、川から離れた土の所等に捨てる。(下流で使う人のことも配慮)



その他

- 調理する人が、手指を水で洗えない場所は除菌スプレーやウェットティッシュ等を利用し、清潔を保つように心がける。
- ペットボトルは切って、じょうご代わりに使う
- 大きいポリ袋を段ボールやポリバケツにかぶせると、水を運んだり保管する容器に早がわり。(フタがない場合は、口をしっかりヒモでしばるか、ガムテープで閉じる。)



地域住民が習得しておくことが望ましい知識・技術

地域住民の皆さんが、災害が発生した場合に備え身につけておくべき知識・技術には、次ページ以降に示すようなものがあります。

これらは、

- ① 災害、事故等が他人事の問題ではなく、いつ何時でも自分や家族を襲うことを認識する。
- ② 自分や家族の安全を守る「自助」に関する知識・能力を身につける。
- ③ 隣人等と協力して地域の安全を守る「共助」に関する知識・能力を身につける。

といった目的のために必要な内容をまとめたものです。

これらの一部は、

- ◎ 総務省消防庁の提供するインターネット上の学習サイト
「防災・危機管理 e-カレッジ (<http://www.e-college.fdma.go.jp>)」
- ◎ 消防機関や日本赤十字社などで実施される「救命講習」
- ◎ 各地の「防災館」

において学習することができます。

「DIG」や「まちなか防災訓練」にこれらを活用した学習を加えるなどし、地域住民の皆さんと一緒に防災力を高めましょう。

「防災・危機管理 e-カレッジ」「救命講習」「防災館」で
災害に対応するための知識や技術を学びましょう！

次の表は、住民の皆さんが、災害に備えて身につけておくべき主な知識・技術についてまとめたものです。

この表を参考に、総務省消防庁の提供するインターネット上の学習サイト「**防災・危機管理 e-カレッジ** (<http://www.e-college.fdma.go.jp>)」、消防機関や日本赤十字社の実施する「救命講習」、地域の「防災館」などを活用し、災害への対応力を身につけましょう。

◎災害に備え身につけておくべき主な知識・技術

(右側に「防災・危機管理 e-カレッジ」に掲載されている関連箇所を示します)

分類	内容		
基礎	各災害の 基礎知識	<p>●災害発生メカニズム</p> <p>地震、津波、風水害、火山災害その他の災害に関して、その発生のメカニズム等についての知識を学習。災害と被害との関係についても学習。</p> <p>●過去の災害事例</p> <p>過去の主な地震災害、風水害、火山噴火、火災などにおける対応事例を学び、問題点・課題について知識修得。</p>	<p>e-カレッジ※</p> <p>[災害の基礎知識コース]</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆地震・津波災害 ◆風水害 ◆火山災害 ◆火災
	地域の 災害危険性と被害想定	<p>●地域の災害危険性</p> <p>自分たちのまちの地理的特性（気象、地形、地盤、活断層）、社会的特性（集落、公共施設、要援護者宅）、危険箇所、過去の災害履歴、土地利用履歴等について知識修得。</p> <p>●各種災害の被害想定等</p> <p>地震被害想定・防災アセスメント結果・浸水予測図・火山ハザードマップ等について知識を修得。</p>	
	防災の しくみ	<p>●防災のしくみ</p> <p>行政機関の防災組織や消防組織を知り、大規模災害における活動の内容等についての知識を修得。</p> <p>また、自分たちの住んでいるまちの地域防災計画や防災対策の現況についても修得。</p>	
	災害に強い まちづくり	<p>●災害に強いまちづくり</p> <p>災害特性に応じたまちづくりの観点から、公共施設、ライフライン、オープンスペース、避難路、避難場所、防災資機材倉庫、防災活動拠点、延焼遮断帯、水利等の役割と重要性について修得。</p>	

※ e-カレッジ：防災・危機管理 e-カレッジ
(<http://www.e-college.fdma.go.jp>)

分類	内容		
災害 予防	災害に対する備え	<p>●事前の備えチェック 非常持ち出し品、3日分の非常備蓄品、家族間の連絡方法（集合場所、NTTの災害伝言ダイヤル利用方法）など事前の家族防災会議で決めておくべき事項等について学習。</p> <p>●我が家の安全性チェック 家具の転倒防止、食器類等の落下防止、寝室の安全対策、プロパンガスボンベ固定の補強、塀の補強、ガラスの飛散防止、消火器の定期点検等のポイントについて学習。</p> <p>●我が家の耐震性チェック 簡易的な診断方法をもとに我が家の耐震性に関する知識を学習。また、併せて耐震診断や耐震補強の必要性についても学習。</p>	<p>e-カレッジ※ [災害への備えコース] ◆事前の備えチェック ◆家庭内の安全性チェック ◆わが家の耐震性チェック</p>
	地域住民の防災活動の促進	<p>●住民の役割 住民が災害時に果たすべき役割と近隣住民どうしの連携について過去の事例や日ごろからの交流のあり方等について学習。</p> <p>●防災マップの作り方 防災マップを作成する際の目的、マップに記載すべき情報等について把握。</p>	<p>e-カレッジ※ [地域防災のの実践コース] ◆地域防災の必要性</p>
災害 応急 対応	発災時の対応(災害時にどう行動したらよいか)	<p>●気象予警報、避難勧告・指示等 風水害、雪害、火山災害に関する警報発令や地震予知等のしくみと意味について学習。また、これらを受けて行われる避難勧告・指示、避難準備等の情報収集とその対応について学習。</p> <p>●災害時にとるべき対応 地震等災害が発生してからの時間を追った形で、危険性(落下物や煙等の危険性)や何をすべきかについて具体的にイメージしながら学習(身の安全確保→火の始末→避難・消火活動・救助活動)。また、置かれた状況(デパート、地下街、屋外、通勤時など)に応じた対処方法についても状況と自らの行動を具体化しながら学習。</p> <p>●情報収集・伝達方法 災害時における情報の入手、伝達方法等について学習。</p>	<p>e-カレッジ※ [災害の基礎知識コース] ◆地震・津波災害 ◆風水害 ◆火山災害 ◆火災</p> <p>e-カレッジ※ [いざという時役立つ知識コース] ◆避難</p>

※ e-カレッジ: 防災・危機管理 e-カレッジ
<http://www.e-college.fdma.go.jp>

分類	内容	
災害 応急 対応	<p>●初期消火 火災を起こさないための知識（火災予防、防災製品）、水のかけ方、消火器・屋内消火栓の使い方、可搬式ポンプの操作方法、バケツリレー、住宅用火災警報器・住宅用ブリンカーの設置、火元別の初期消火のコツなどについて修得。</p> <p>●応急手当の方法 応急処置の方法、感染防止、止血法、心肺蘇生法など救命救急の方法について修得。</p> <p>●救助方法 救助資機材の使用法、応急担架の作製方法・負傷者搬送方法について学習。</p> <p>●要援護者の安全確保(地域住民との協力) 災害時要援護者（高齢者・乳幼児・妊婦・身体障害者・負傷者・外国人）の安全確保、避難誘導は地域全体での助け合いが重要であり、そのポイントについて学習。</p> <p>●安全な避難方法 火災・煙からの避難、津波・洪水からの避難などの迅速で安全な避難の方法・ポイントについて学習。また、避難場所の理解が重要。 <ul style="list-style-type: none"> ・避難場所の区分 ・安全な避難路 ・避難時の服装等 ・避難時の安全対策（電気ブレーカー、ガスのメインバルブ等） </p> <p>●避難所活動 避難所で生活していく上での留意事項について学習。</p> <p>●サバイバル技術 震災時等において、様々なものを活用して生き抜いていく技術を習得。</p>	
	災害 復旧	<p>●復旧への対応 ライフライン等の復旧時期を知り、復旧時において二次的な災害に留意することの学習。</p>
	災害 復旧 ・ 復興	<p>●復旧・復興への住民の取り組み 地域の復旧・復興は、地方公共団体が主体であるが、住民の意向も考慮した災害に強いまちになるための基本的なことを学習。</p>

e-カレッジ※
[いざという時役立つ知識コース]
◆初期消火
◆救命手当
◆救助

e-カレッジ※
[いざという時役立つ知識コース]
◆避難

e-カレッジ※
[地域防災の実践コース]
◆地域の防災リーダーの役割

※ e-カレッジ: 防災・危機管理 e-カレッジ
(<http://www.e-college.fdma.go.jp>)

自主防災組織の活動支援等

◎ 防火防災訓練災害補償等共済制度

市区町村や自主防災組織が行う防火防災訓練において、訓練参加者が訓練に起因する事故により傷害を受けた場合に、市区町村が行う補償等に関する共済制度です。

(財) 日本消防協会により実施されている共済制度で、市区町村が加入するもので、一般の方が加入するものではありませんが、次に示すように、自主防災組織の自主的な訓練であっても、市区町村又は消防機関に訓練計画書の届出があれば、補償等の対象となりますので、訓練を行う場合は必ず届出るようにしましょう。

防火防災訓練災害補償等共済制度の概要

補償等の対象となる訓練	(1) 市町村（特別区及び市町村の一部事務組合を含む。）又は市町村の消防機関の主催する防火防災訓練で当該地域内の民間防火組織（自主防災組織、婦人防火クラブ、少年消防クラブ等）が参加したもの。	
	(2) 市町村の地域内の民間防火組織の自主的な防火防災訓練で市町村又は市町村の消防機関に計画書の届出のあったもの。	
	(3) (1) 又は(2) に準ずる方法により実施した防火防災訓練で、市町村の地域内の町内会及び婦人会等が防火防災訓練に参加したもの。	
補償の種類	損害賠償死亡一時金	限度額 5,000 万円
	損害賠償傷害一時金	限度額 5,000 万円
	災害補償死亡一時金	700 万円
	災害補償後遺症傷害一時金	限度額 700 万円
	入院療養補償	3,500 円×入院日数 (90 日を限度)
	通院療養補償	2,500 円×実通院日数 (事故発生の日から 90 日以内の通院)
	休業補償	3,000 円×休業日数 (90 日を限度)

※ 上記の内容は平成16年9月1日時点のものです。

※ 「防火防災訓練災害補償等共済制度」に関するお問い合わせは次までお願いします。

(財) 日本消防協会 管理部管理課 TEL:03-3503-1481

市区町村・都道府県によっては、市民活動に関して上記の制度以外の災害補償制度を設けている場合もありますので、あらかじめ調べておきましょう。

また、損害保険会社に、レクリエーション保険や行事保険といった保険の活用について問い合わせてみてもよいでしょう。

◎ 自主防災組織の活動支援策

自主防災組織の活動に関しては、活動そのもの、また、必要な資機材整備についての支援・助成が受けられる場合があります。

例えば、(財)自治総合センターでは、「コミュニティ助成事業（自主防災組織育成助成事業）」により、下表に例示されているような資機材の整備に対する助成が行われています。この助成については、市区町村長から申請を行う必要があるため、活用については市区町村の窓口にてご相談ください。

また、市区町村・都道府県が独自の支援・助成制度を設けている場合もありますので確認しておくとい良いでしょう。

なお、国においては、市区町村が行う自主防災組織の活動支援に対する補助金制度を設けており、次頁の表に示すような資機材の整備等について助成を行っています。

(財)自治総合センター「コミュニティ助成事業」
自主防災組織育成助成事業 参考例（平成17年度）

No.	区分	施設又は設備
1	情報連絡用	携帯用無線機、受令機、電池メガホン、携帯用ラジオ、腕章等
2	消火用	可搬式動力ポンプ、可搬式散水装置、防火水槽、ホース、スタンドパイプ、格納器具一式、街頭用消火器、防火衣、鳶口、ヘルメット、水バケツ、防火井戸等
3	水防用	救命ボート、ロープ、ツルハシ、防水シート、シャベル、救命胴衣、かけや等
4	救出救護用	AED、エンジンカッター、油圧式救助器具、可搬式ウィンチ、テント、チェンブロック、チェーンソー、ジャッキ、バール、救急箱、はしご、担架、防煙・防塵マスク、毛布、簡易ベッド、のこぎり等
5	給食給水用	給水タンク、緊急用ろ水装置、飲料用水槽、炊飯装置等
6	避難所・避難用	リヤカー、発電機、警報器具、携帯用投光器、標識板、標旗、強力ライト、簡易トイレ、寝袋、組立式シャワー等
7	防災教育用	模擬消火訓練装置、放送機器、119番通報訓練用装置、組立式水槽、煙霧機、ビデオ装置、映写機、火災実験装置、訓練用消火器、心肺蘇生訓練用人形等
8	その他	簡易資機材倉庫、除雪機等

消防防災設備整備費補助金（自主防災組織活性化事業）
補助対象資機材等（平成17年度）

初期消火資機材	可搬式小型動力ポンプ、可搬式散水装置、大型消火器、スタンドパイプ、組立型水槽、ホースボックス、活動服一式（消火）、その他初期消火活動に必要な資機材
救助用資機材	携帯用無線通信機、ハンドマイク、発電器、投光器、チェーンソー、エンジンカッター、可搬式ウィンチ、チェーンブロック、ジャッキ、担架、梯子、救命ロープ、油圧式救助器具、除雪機、活動服一式（難燃）、AED、その他救助活動に必要な資機材
救護用資機材	ろ水器、救急医療セット、防水シート、揚水機、毛布、簡易ベッド、簡易トイレ、炊飯装置、リヤカー、防災井戸、組立式シャワー、その他救護活動に必要な資機材
訓練用資機材	人命救助訓練用人形、訓練用消火器具、視聴覚機器（ビデオ教材等）、その他訓練に必要な資機材
避難誘導用資機材	チェーンソー、可搬式ウィンチ、ジャッキ、担架、梯子、救命ロープ、救急医療セット、発電器、投光器、消火器、ヘルメット、バール、携帯用無線通信機、ハンドマイク、その他避難誘導に必要な資機材
簡易収納庫あるいは防災倉庫	
事務雑費	自主防災組織の防災計画策定に要する経費をいい、基準額に対する割合は、2.9%以内とする。
諸経費	防災計画に基づき訓練・研修等を実施するために必要な会場借上料、消耗品費、印刷製本費、講師謝金、講師旅費等をいい、基準額の5%以内の額とする。

各都道府県の自主防災組織の状況（平成16年4月1日現在）

都道府県	自主防災組織組織数				自主防災組織 隊員数	管内世帯数 (A)	組織されてい る地域の世帯 数(B)	組織率(B/A)
	町内会単位	小学校単位	その他	合計				
北海道	2,574	0	187	2,761	101,222	2,522,295	945,861	37.5%
青森県	287	0	123	410	25,508	551,806	137,579	24.9%
岩手県	308	3	502	813	169,267	488,354	290,089	59.4%
宮城県	1,615	0	1,242	2,857	600,077	856,527	677,839	79.1%
秋田県	2,407	3	195	2,605	166,253	410,308	228,832	55.8%
山形県	2,140	43	31	2,214	271,708	387,732	201,815	52.1%
福島県	1,930	12	159	2,101	438,008	716,505	557,212	77.8%
茨城県	2,114	64	87	2,265	798,101	1,039,865	573,296	55.1%
栃木県	2,586	23	280	2,889	288,546	701,919	505,494	72.0%
群馬県	1,192	4	140	1,336	268,508	719,576	445,506	61.9%
埼玉県	2,985	0	54	3,039	842,753	2,660,152	1,439,813	54.1%
千葉県	4,042	15	12	4,069	1,435,287	2,348,339	1,239,495	52.8%
東京都	5,600	114	339	6,053	4,376,135	5,776,805	4,390,496	76.0%
神奈川県	6,576	455	78	7,109	3,720,850	3,602,950	2,909,424	80.8%
新潟県	1,001	11	54	1,066	195,040	810,483	192,245	23.7%
富山県	501	33	85	619	100,404	367,754	133,415	36.3%
石川県	1,091	83	226	1,400	375,543	417,164	283,379	67.9%
福井県	1,613	7	82	1,702	46,302	260,744	133,367	51.1%
山梨県	2,577	0	2	2,579	618,699	319,146	307,906	96.5%
長野県	2,773	4	29	2,806	575,985	777,553	544,995	70.1%
岐阜県	4,127	50	86	4,263	478,270	701,408	561,898	80.1%
静岡県	5,115	0	4	5,119	1,706,575	1,347,330	1,331,345	98.8%
愛知県	9,211	34	301	9,546	2,298,008	2,634,915	2,539,767	96.4%
三重県	2,995	158	101	3,254	234,456	672,654	564,034	83.9%
滋賀県	1,840	6	93	1,939	99,062	460,199	301,077	65.4%
京都府	1,222	237	44	1,503	1,600,649	1,048,788	878,466	83.8%
大阪府	1,468	153	51	1,672	468,714	3,657,248	2,274,911	62.2%
兵庫県	5,378	244	108	5,730	1,863,915	2,187,130	2,050,595	93.8%
奈良県	418	6	14	438	77,840	525,535	118,740	22.6%
和歌山県	528	55	75	658	249,953	411,063	239,482	58.3%
鳥取県	1,877	34	99	2,010	100,967	216,963	120,429	55.5%
島根県	765	28	47	840	32,907	267,189	73,238	27.4%
岡山県	1,728	21	322	2,071	139,608	732,253	306,741	41.9%
広島県	2,109	70	22	2,201	242,154	1,161,859	698,294	60.1%
山口県	2,598	15	207	2,820	274,541	620,630	266,018	42.9%
徳島県	461	7	56	524	86,523	305,362	163,884	53.7%
香川県	1,785	19	149	1,953	156,723	389,901	199,089	51.1%
愛媛県	458	13	35	506	227,821	603,933	158,103	26.2%
高知県	586	7	121	714	104,824	341,873	92,685	27.1%
福岡県	3,064	245	41	3,350	911,055	2,023,115	722,503	35.7%
佐賀県	128	1	4	133	19,133	293,751	30,146	10.3%
長崎県	1,316	0	79	1,395	256,980	591,017	179,996	30.5%
熊本県	765	6	95	866	256,140	690,743	169,953	24.6%
大分県	3,096	7	26	3,129	413,065	480,113	347,244	72.3%
宮崎県	2,068	0	112	2,180	263,318	475,947	289,640	60.9%
鹿児島県	2,334	34	83	2,451	426,083	759,742	336,913	44.3%
沖縄県	91	0	3	94	2,758	501,093	19,906	4.0%
全国計	103,443	2,324	6,285	112,052	28,406,238	49,837,731	31,173,155	62.5%

日本の主な断層帯および周辺海域の地震長期評価

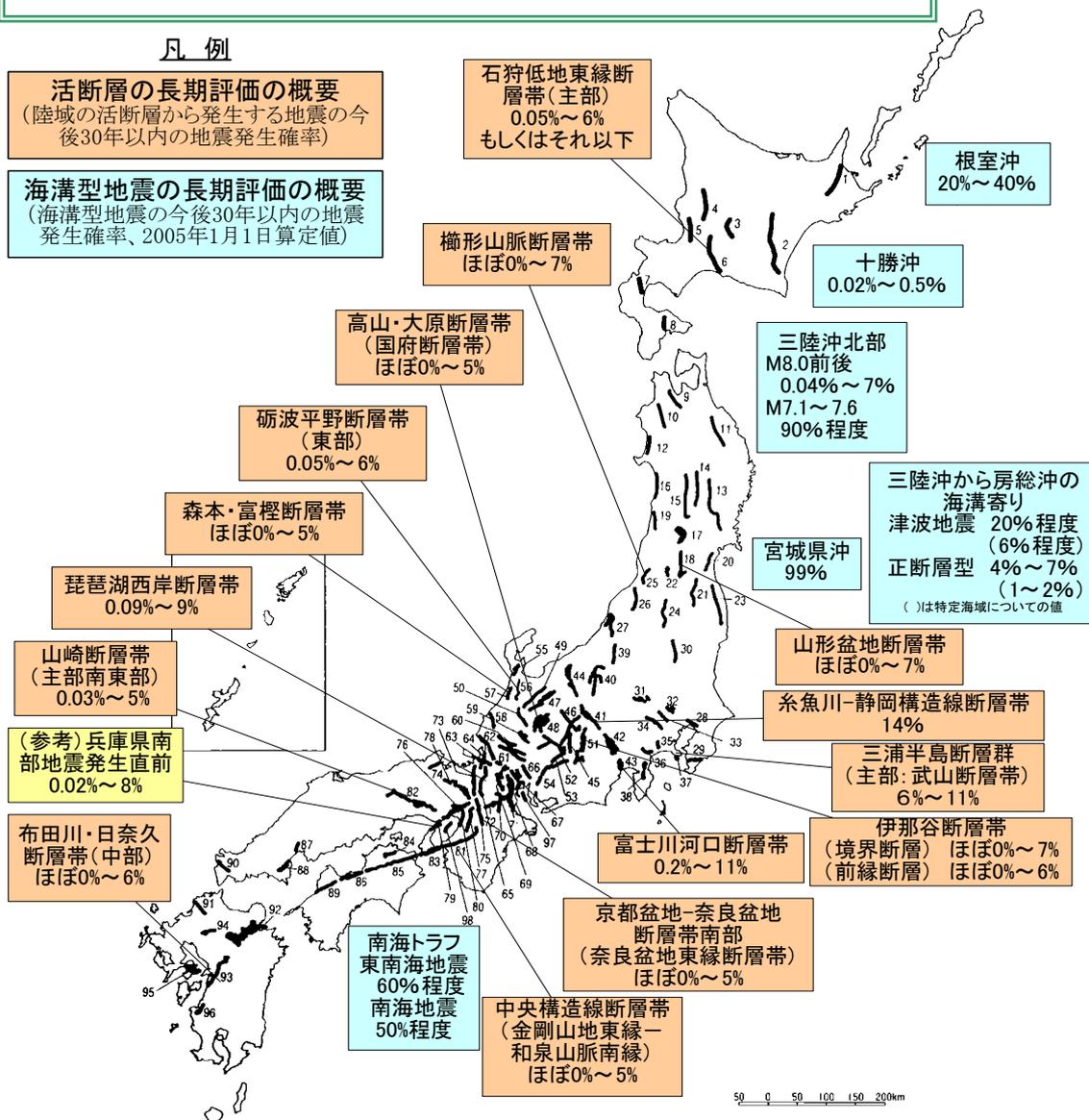
今までに活断層および海溝型地震の長期評価結果（抜粋）

（今までに活断層および海溝型地震の長期評価結果一覧（平成 17 年 1 月 12 日現在）地震調査委員会」を基に作成）

凡例

活断層の長期評価の概要
（陸域の活断層から発生する地震の今後30年以内の地震発生確率）

海溝型地震の長期評価の概要
（海溝型地震の今後30年以内の地震発生確率、2005年1月1日算定値）



地震調査委員会は、平成 17 年 1 月 12 日現在、主要 98 断層帯のうち 69 断層帯、海溝型地震のうち南海トラフの地震（東南海・南海地震）、三陸沖から房総沖にかけての地震（宮城県沖地震を含む）、千島海溝沿いの地震、日本海東縁部の地震、日向灘および南西諸島海溝周辺の地震、相模トラフ沿いの地震について評価をまとめ公表しています。

なお、上の図はその一部を掲載していますので、日本のすべての断層等を表記しているものではありませんのでご注意ください。

参考文献

- 「自主防災組織の手引きーコミュニティと防災」 (総務省消防庁)
- 「婦人防火クラブリーダーマニュアル」 (編集・発行：(財) 日本防火協会)
- 「やってみよう！！発災対応型防災訓練 ～防災マップづくりからオリジナル防災訓練へ～」
(編著・発行：(財) 市民防災研究所、監修：東京消防庁)
- 「雪 (1995年4月号)」 (編集：神戸市消防局広報誌『雪』編集部)
- 「防災・危機管理教育のあり方に関する調査懇談会 報告書」 (平成15年3月 総務省消防庁)
- 「災害・緊急時・キャンプ等で困らない 簡単料理 あらかるとー栄養士がすすめる身近な食材の活用方法ー」 (編集・発行：(社) 富山県栄養士会 地域活動栄養士協議会)